藤村詩抄

島崎藤村自選

島崎藤村

青空文庫

自序

若菜集、一葉舟、夏草、落梅集の四巻をまとめて合本の詩集をつくりし時に

遂に、新しき詩歌の時は來りぬ。

そはうつくしき曙のごとくなりき。あるものは古の預言者の如く叫び、あるものは西の詩人のごとくに呼ばゝり、いづれも明光と新聲と空想とに醉へるがごとくなりき。

うらわかき想像は長き眠りより覺めて、民俗の言葉を飾れり。傳説はふたゝびよみがへりぬ。自然はふたゝび新しき色を帶びぬ。明光はまのあたりなる生と死とを照せり、過去の壯大と衰頽とを照せり。

新しきうたびとの群の多くは、たゞ穆實なる青年なりき。その藝術は幼稚なりき、不完全なりき、されどまた僞りも飾りもなかりき。青春のいのちはかれらの口脣にあふれ、感激の涙はかれらの頰をつたひしなり。こゝろみに思へ、清新横溢なる思潮は幾多の青年をして殆ど寢食を忘れしめたるを。また思へ、近代の悲哀と煩悶とは幾多の青年をして狂せしめたるを。われも拙き身を忘れて、この新しきうたびとの聲に和しぬ。

詩歌は靜かなるところにて思ひ起したる感動なりとかや。げにわが歌ぞおぞき苦闘の告白なる。

なげきと、わづらひとは、わが歌に殘りぬ。思へば、言ふぞよき。ためらはずして言ふぞよき。いさゝかなる活動に勵まされてわれも身と心とを救ひしなり。

誰か舊き生涯に安んぜむとするものぞ。おのがじゝ新しきを開かんと思へるぞ、若き人々のつとめなる。生命は力なり。力は聲なり。聲は言葉なり。新しき言葉はすなはち新しき生涯なり。

われもこの新しきに入らんことを願ひて、多くの寂しく暗き月日を過しぬ。

藝術はわが願ひなり。されどわれは藝術を輕く見たりき。むしろわれは藝術を第二の人生と見たりき。また第二の自然とも見たりき。

あゝ詩歌はわれにとりて自ら責むるの鞭にてありき。わが若き胸は溢れて、花も香もなき根無草四つの巻とはなれり。われは今、青春の記念として、かゝるおもひでの歌ぐさかきあつめ、友とする人々のまへに捧げむとはするなり。

明治卅七年の夏

藤村

抄本を出すにつきて

二十五六といふ青年時代が二度と自分の生涯には來ないやうに、最初の詩集も自分には二冊とは無いものだ。その意味から、曾て私はこれらの詩を作つた當時のことを原本の詩集のはじに書きつけて置いたこともある。

明治二十九年の秋、私は仙臺へ行つた。あの東北の古い靜かな都會で私は一年ばかりを送つた。私の生涯はそこへ行つて初めて夜が明けたやうな氣がした。私は仙臺名影町の宿舍で書いた詩稿を毎月東京へ送つて、その以前から友人同志で出してゐた雜誌『文學界』に載せた。それを一冊に集めて、『若菜集』として公にしたのが、私の最初の詩集だ。私の文學生涯に取つての處女作とも言ふべきものであつた。その頃の詩の世界は非常に狹い不自由なもので、自分等の思ふやうな詩はまだ〳〵遠い先の方に待つてゐるやうな氣がしたが、兎も角も先蹤を離れよう、詩といふものをもつと〳〵自分等の心に近づけようと試みた。默し勝ちな私の口唇はほどけて來た。

心の宿の宮城野よ
亂れて熱き吾身には
日影も薄く草枯れて
荒れたる野こそうれしけれ

ひとりさみしき吾耳は
吹く北風を琴と聽き
悲しみ深き吾眼には
色無き石も花と見き

（草枕）

私が一生の曙はこんな風にして開けて來た。

明治三十一年の春には私は東京の方に歸つてゐて、第二の集を出した。それは『一葉舟』とした詩文集で、その中には『若菜集』以後仙臺で書いた『鷲の歌』の外に、東京に歸つてからの詩數篇をも納めたものである。同じ年の夏、鄉里の木曾へ旅して、福島にある姉の家で『夏草』を書いた。私の第三の詩集だ。

私が信州小諸へ行つてあの山の上の町に落ちつくやうになつたのは、翌三十二年のことであつた。そこで私はまた詩作をはじめて、第四の詩集をつくつた。『落梅集』はその全部が千曲川の旅情ともいふべきものである。

私の青春の形見ともいふべき四卷の詩集は、明治二十九年より三十三年へかけ前後五年に亙つて、それ〳〵〳〵別冊として公にしたものであつたが、三十七年の夏に『一葉舟』や『落梅集』から散文の部を省いて、合本一卷とした。私の詩集として世に流布してゐるものがそれである。

さういふ私は今、岩波書店の主人から普及叢書の一冊として、この詩集の抄本をつくることを求められた。思ふに、原本の詩集を縮め、僅かの省略を行ひ、たゞ形を變へるといふだけのことならば、抄本をつくることもさう骨は折れまい。しかしそれでは意味はすくない。長い月日の間には原本の詩集も幾度かの編み直しと改刷とを經たものであるが、更に私は編み方を變へて、此の抄本をつくるこ

とにした。尤も、詩集としての内容にさう變りのあらう筈もないが、編み方に意を用ひたなら、抄本は抄本として意味あるものとならうかと思ふ。

これを編むにつけても、もつと私は嚴しく選むべきであつたかとも考へる。今になつて見ると『若菜集』の中に、仙臺時代以前に書いた二三の古い詩を見つける。『君と遊ばむ』『流星』なぞがそれで、さういふものは省いたらとも考へたが、自分の出發の支度はそんなところにあつたことを思ひ、未熟なものも一概にそれを省き去る氣になれなかつた。原本の詩集のうち、一番多くを省いたのは『夏草』の中からで、『若菜集』や『落梅集』からも長短數篇を省いた。題目等もこの抄本にはいくらか改めて置いたものもある。すべてはこれらの詩を書いた當時の自分の心持に近づけることを主にした。

思へば私が『若菜集』を出したのは、今から三十一年の前にもあたる。この古い落葉のやうな詩が今日まで讀まれて來たといふことすら、私には意外である。頭髪既に白い私がこれを編むのは、自分の青年時代を編むやうなものである。この抄本をつくるにつけても、今昔の感が深い。

昭和二年五月

麻布飯倉にて

著者

若菜集より

明治二十九年――同三十年

（仙臺にて）

序のうた

心無(こゝろな)き歌のしらべは
一房(ひとふさ)の葡萄のごとし
なさけある手にも摘(つ)まれて
あたゝかき酒となるらむ

葡萄棚ふかくかゝれる
紫(むらさき)のそれにあらねど
こゝろある人のなさけに
蔭に置く房の三つ四つ

そは歌の若きゆゑなり
味ひも色も淺くて
おほかたは噛(か)みて捨つべき
うたゝ寢の夢のそらごと

草枕

夕波くらく啼く千鳥
われは千鳥にあらねども
心の羽(はね)をうちふりて
さみしきかたに飛べるかな

若き心の一筋に
なぐさめもなくなげきわび
胸の氷のむすぼれて
とけて涙となりにけり

蘆葉(あしは)を洗ふ白波の
流れて巌(いは)を出づるごと
思ひあまりて草枕
まくらのかずの今いくつ

かなしいかなや人の身の
なきなぐさめを尋ね侘び
道なき森に分け入りて
などなき道をもとむらむ

われもそれかやうれひかや
野末に山に谷蔭(たにかげ)に
見るよしもなき朝夕の
光もなくて秋暮れぬ

想(おもひ)も薄く身も暗く
殘れる秋の花を見て
行くへもしらず流れ行く
水に涙の落つるかな

身を朝雲(あさぐも)にたとふれば
ゆふべの雲の雨となり
身を夕雨(ゆふあめ)にたとふれば
あしたの雨の風となる

されば落葉(おちば)と身をなして
風に吹かれて飄(ひるがへ)り
朝(あさ)の黄雲(きぐも)にともなはれ
夜(よる)白河を越えてけり

道なき今の身なればか
われは道なき野を慕ひ
思ひ亂れてみちのくの
宮城野にまで迷ひきぬ

心の宿(やど)の宮城野よ
亂れて熱き吾身には
日影も薄く草枯れて
荒れたる野こそうれしけれ

ひとりさみしき吾耳は
吹く北風を琴と聽き
悲み深き吾目には
色彩(いろ)なき石も花と見き

あゝ孤獨(ひとりみ)の悲痛(かなしさ)を
味ひ知れる人ならで
誰にかたらむ冬の日の
かくもわびしき野のけしき

都のかたをながむれば
空冬雲(そらふゆぐも)に覆はれて
身にふりかゝる玉霰(たまあられ)
袖の氷と閉ぢあへり

みぞれまじりの風勁(つよ)く
小川の水の薄氷
氷のしたに音(おと)するは
流れて海に行く水か

啼いて羽風(はかぜ)もたのもしく
雲に隱るゝかさゝぎよ
光もうすき寒空(さむぞら)の
汝(なれ)も荒れたる野にむせぶ

涙も凍る冬の日の
光もなくて暮れ行けば
人めも草も枯れはてゝ
ひとりさまよふ吾身かな

かなしや醉うて行く人の
踏めばくづるゝ霜柱
なにを醉ひ泣く忍び音(ね)に
聲もあはれのその歌は

うれしや物の音(ね)を彈(ひ)きて
野末をかよふ人の子よ
聲調(しらべ)ひく手も凍りはて
なに門(かど)づけの身の果ぞ

やさしや年もうら若く
まだ初戀のまじりなく
手に手をとりて行く人よ
なにを隱るゝその姿

野のさみしさに堪へかねて
霜と霜との枯草の
道なき道をふみわけて
きたれば寒し冬の海

朝は海邊(うみべ)の石の上(へ)に
こしうちかけてふるさとの
都のかたを望めども
おとなふものは濤(なみ)ばかり

暮はさみしき荒磯(あらいそ)の
潮(うしほ)を染めし砂に伏し
日の入るかたをながむれど
湧きくるものは涙のみ

さみしいかなや荒波の
岩に碎けて散れるとき
かなしいかなや冬の日の
潮(うしほ)とともに歸るとき

誰か波路を望み見て
そのふるさとを慕はざる
誰か潮の行くを見て
この人の世を惜まざる

曆(こよみ)もあらぬ荒磯の
砂路にひとりさまよへば
みぞれまじりの雨雲の
落ちて汐(うしほ)となりにけり

遠く湧きくる海の音(おと)
慣れてさみしき吾耳に
怪しやもるゝものの音(ね)は
まだうらわかき野路の鳥

嗚呼めづらしのしらべぞと
聲のゆくへをたづぬれば
緑の羽(はね)もまだ弱き
それも初音か鶯の

春きにけらし春よ春
まだ白雪の積れども
若菜の萌えて色青き
こゝちこそすれ砂の上(へ)に

春きにけらし春よ春
うれしや風に送られて
きたるらしとや思へばか
梅が香ぞする海の邊(べ)に

磯邊に高き大巌（おほいは）の
うへにのぼりてながむれば
春やきぬらむ東雲（しののめ）の
潮（しほ）の音遠き朝ぼらけ

二つの聲

朝

たれか聞くらむ朝の聲
眠(ねむり)と夢を破りいで
彩(あや)なす雲にうちのりて
よろづの鳥に歌はれつ
天のかなたにあらはれて
東の空に光(ひかり)あり
そこに時(とき)あり始(はじめ)あり
そこに道(みち)あり力(ちから)あり
そこに色あり詞(ことば)あり
そこに聲あり命(いのち)あり
そこに名ありとうたひつゝ
みそらにあがり地にかけり
のこんの星ともろともに
光(ひかり)のうちに朝ぞ隱るゝ

暮

たれか聞くらむ暮の聲
霞の翼(つばさ)雲の帶
煙の衣露(ころも)の袖
つかれてなやむあらそひを
闇のかなたに投(な)げ入れて
夜(よる)の使(つかひ)の蝙蝠の
飛ぶ間(ま)も聲のをやみなく
こゝに影あり迷(まよひ)あり
こゝに夢あり眠(ねむり)あり
こゝに闇あり休息(やすみ)あり
こゝに永きあり遠きあり
こゝに死(し)ありとうたひつゝ
草木(くさき)にいこひ野にあゆみ
かなたに落つる日とともに
色なき闇に暮ぞ隱るゝ

松島瑞巌寺に遊びて

舟路(ふなぢ)も遠し瑞巌寺(ずゐがんじ)
冬逍遥(ふゆせうえう)のこゝろなく
古き扉に身をよせて
飛騨の名匠(たくみ)の浮彫(うきぼり)の
葡萄のかげにきて見れば
菩提の寺の冬の日に
刀悲(かたかな)しみ鑿(のみ)愁(うれ)ふ
ほられて薄き葡萄葉の
影にかくるゝ栗鼠(きねずみ)よ
姿ばかりは隠すとも
かくすよしなし鑿(のみ)の香(か)は
うしほにひゞく磯寺の
かねにこの日の暮るゝとも
夕闇(ゆふやみ)かけてたゝずめば
こひしきやなぞ甚五郎

春

一　たれかおもはむ

たれかおもはむ鶯の
涙もこほる冬の日に
若き命は春の夜の
花にうつろふ夢の間(ま)と
あゝよしさらば美酒(うまざけ)に
うたひあかさん春の夜を

梅のにほひにめぐりあふ
春を思へばひとしれず
からくれなゐのかほばせに
流れてあつきなみだかな
あゝよしさらば花影に
うたひあかさむ春の夜を

わがみひとつもわすられて
おもひわづらふこゝろだに
春のすがたをとめくれば
たもとににほふ梅の花
あゝよしさらば琴の音に
うたひあかさむ春の夜を

二　あけぼの

紅細(くれなゐ)くたなびける
雲とならばやあけぼのの
　雲とならばや

やみを出でては光ある
空とならばやあけぼのの
　空とならばや

春の光を彩(いろど)れる
水とならばやあけぼのの
　水とならばや

鳩に履まれてやはらかき
草とならばやあけぼのの
　草とならばや

三　春は來ぬ

春はきぬ
　春はきぬ
初音やさしきうぐひすよ
こぞに別離(わかれ)を告げよかし
谷間に殘る白雪よ
葬(はふり)かくせ去歳(こぞ)の冬

春はきぬ
　春はきぬ
さみしくさむくことばなく
まづしくくらくひかりなく
みにくくおもくちからなく
かなしき冬よ行きねかし

春はきぬ
　春はきぬ
淺みどりなる新草(にひぐさ)よ
とほき野面(のもせ)を畫(ゑが)けかし
さきては紅(あか)き春花(はるばな)よ
樹々(きゞ)の梢を染めよかし

春はきぬ
　春はきぬ
霞よ雲よ動(ゆる)ぎいで
氷れる空をあたゝめよ
花の香(か)おくる春風よ
眠れる山を吹きさませ

春はきぬ
　春はきぬ
春をよせくる朝汐(あさじほ)よ
蘆の枯葉(かれは)を洗ひ去れ
霞に醉へる雛鶴よ
若きあしたの空に飛べ

春はきぬ
　春はきぬ
うれひの芹の根は絶えて
氷れるなみだ今いづこ
つもれる雪の消えうせて
けふの若菜と萌えよかし

四　眠れる春よ

ねむれる春よううらわかき
かたちをかくすことなかれ
たれこめてのみけふの日を
なべてのひとのすぐすまに
さめての春のすがたこそ

また夢のまの風情なれ

ねむげの春よさめよ春
さかしきひとのみざるまに
若紫の朝霞
かすみの袖をみにまとへ
はつねうれしきうぐひすの
鳥のしらべをうたへかし

ねむげの春よさめよ春
ふゆのこほりにむすぼれし
ふるきゆめぢをさめいでて
やなぎのいとのみだれがみ
うめのはなぐしさしそへて
びんのみだれをかきあげよ

ねむげの春よさめよ春
あゆめばたにの早わらびの
したもえいそぐ汝があしを
たかくもあげよあゆめ春
たえなるはるのいきを吹き
こぞめの梅の香ににほへ

五　うてや鼓

うてや鼓の春の音
雪にうもるゝ冬の日の
かなしき夢はとざされて
世は春の日とかはりけり

ひけばこぞめの春霞
かすみの幕をひきとぢて
花と花とをぬふ絲は
けさもえいでしあをやなぎ

霞のまくをひきあけて
春をうかがふことなかれ
はなさきにほふ蔭をこそ
春の臺といふべけれ

小蝶よ花にたはふれて
優しき夢をみては舞ひ
醉うて羽袖もひら〳〵と
はるの姿をまひねかし

緑のはねのうぐひすよ
梅の花笠ぬひそへて
ゆめ靜なるはるの日の
しらべを高く歌へかし

明星

浮べる雲と身をなして
あしたの空に出でざれば
などしるらめや明星の
光の色のくれなゐを

朝の潮と身をなして
流れて海に出でざれば
などしるらめや明星の
清みて哀しききらめきを

なにかこひしき暁星の
空しき天の戸を出でて
深くも遠きほとりより
人の世近く來るとは

潮の朝のあさみどり
水底深き白石を
星の光に透かし見て
朝の齢を數ふべし

野の鳥ぞ啼く山河も
ゆふべの夢をさめいでて
細く棚引くしのゝめの
姿をうつす朝ぼらけ

小夜には小夜のしらべあり
朝には朝の音もあれど
星の光の絲の緒に
あしたの琴は靜なり

まだうら若き朝の空
きらめきわたる星のうち
いちいと若き光をば
名けましかば明星と

潮音

わきてながるゝ
やほじほの
そこにいざよふ
うみの琴
しらべもふかし
もゝかはの
よろづのなみを
よびあつめ
ときみちくれば
うらゝかに
とほくきこゆる
はるのしほのね

おえふ

處女(をとめ)ぞ經(へ)ぬるおほかたの
われは夢路(ゆめぢ)を越えてけり
わが世の坂にふりかへり
いく山河(やまかは)をながむれば

水靜(みづしづ)かなる江戸川の
ながれの岸にうまれいで
岸の櫻の花影(はなかげ)に
われは處女(をとめ)となりにけり

都鳥(みやこどり)浮(う)く大川(おほかは)に
流れてそゝぐ川添(かはぞひ)の
白菫(しろすみれ)さく若草(わかくさ)に
夢多かりし吾身かな

雲むらさきの九重(こゝのへ)の
大宮内につかへして
清涼殿(せいりやうでん)の春の夜(よ)の
月の光に照らされつ

雲を彫(ちりば)め濤(なみ)を刻(ほ)り
霞をうかべ日をまねく
玉の臺の欄干(うてなおばしま)に
かゝるゆふべの春の雨

さばかり高き人の世の
耀(かゞや)くさまを目にも見て
ときめきたまふさまざまの
ひとのころもの香(か)をかげり

きらめき初(そ)むる曉星(あかぼし)の
あしたの空に動くごと
あたりの光きゆるまで
さかえの人のさまも見き

天(あま)つみそらを渡る日の
影かたぶけるごとくにて
名(な)の夕暮(ゆふぐれ)に消えて行く
秀(ひい)でし人の末路(はて)も見き

春しづかなる御園生(みそのふ)の
花に隠れて人を哭(な)き
秋のひかりの窓に倚り

夕雲(ゆふぐも)とほき友を戀(こ)ふ

ひとりの姉をうしなひて
大宮内の門(かど)を出で
けふ江戸川に來(き)て見れば
秋はさみしきながめかな

櫻の霜葉黄(しもはき)に落ちて
ゆきてかへらぬ江戸川や
流れゆく水靜(しづか)にて
あゆみは遲きわがおもひ

おのれも知らず世を經(ふ)れば
若き命(いのち)に堪へかねて
岸のほとりの草を藉(し)き
微笑(ほゝゑ)みて泣く吾身かな

おきぬ

みそらをかける猛鷲(あらわし)の
人の處女(をとめ)の身に落ちて
花の姿に宿(やど)かれば
風雨(あらし)に渇(かわ)き雲に饑(う)ゑ
天翔(あまかけ)るべき術(すべ)をのみ
願ふ心のなかれとて
黒髪長(くろかみ)き吾身こそ
うまれながらの盲目(めしひ)なれ

芙蓉を前(さき)の身とすれば
泪(なみだ)は秋の花の露
小琴(をごと)を前(さき)の身とすれば
愁(うれひ)は細き糸の音(おと)
いま前(さき)の世は鷲の身の
處女(をとめ)にあまる羽翼(つばさ)かな

あゝあるときは吾心
あらゆるものをなげうちて
世はあぢきなき淺茅生(あさぢふ)の
茂(しげ)れる宿(やど)と思ひなし

身は術(すべ)もなき蟋蟀(こほろぎ)の
夜(よる)の野草(のぐさ)にはひめぐり
たゞいたづらに音(ね)をたてて
うたをうたふと思ふかな

色(いろ)にわが身をあたふれば
處女(をとめ)のこゝろ鳥となり
戀に心をあたふれば
鳥の姿は處女(をとめ)にて
處女(をとめ)ながらも空(そら)の鳥
猛鷲(あらわし)ながら人の身の
天(あめ)と地(つち)とに迷ひゐる
身の定めこそ悲しけれ

おさよ

潮(うしお)さみしき荒磯(あらいそ)の
巌陰(いはかげ)われは生れけり

あしたゆふべの白駒(しろごま)と
故郷(ふるさと)遠きものおもひ

をかしくものに狂へりと
われをいふらし世のひとの

げに狂はしの身なるべき
この年までの處女(をとめ)とは

うれひは深く手もたゆく
むすぼゝれたるわが思(おもひ)

流れて熱(あつ)きわがなみだ
やすむときなきわがこゝろ

亂(みだ)れてものに狂ひよる
心を笛の音(ね)に吹かむ

笛をとる手は火にもえて
うちふるひけり十の指(ゆび)

音(ね)にこそ渇(かわ)け口脣(くちびる)の
笛を尋ぬる風情(ふぜい)あり

はげしく深きためいきに
笛の小竹(をだけ)や曇るらむ

髪は亂れて落つるとも
まづ吹き入るゝ氣息(いき)を聽け

力(ちから)をこめし一ふしに
黄楊(つげ)のさし櫛(くし)落ちにけり

吹けば流るゝ流るれば
笛吹き洗ふわが涙

短き笛の節(ふし)の間(ま)も
長き思(おもひ)のなからずや

七つの情聲(こゝろ)を得て
音(ね)をこそきかめ歌神(うたがみ)も

われ喜(よろこび)を吹くときは
鳥も梢に音(ね)をとゞめ

怒(いかり)をわれの吹くときは
瀬(せ)を行く魚も淵(ふち)にあり

われ哀(かなしみ)を吹くときは
獅子(しし)も涙をそゝぐらむ

われ樂(たのしみ)を吹くときは
蟲も鳴く音(ね)をやめつらむ

愛(あい)のこゝろを吹くときは
流るゝ水のたち歸り

惡(にくみ)をわれの吹くときは
散り行く花も止(とゞま)りて

慾(よく)の思(おもひ)を吹くときは
心の闇(やみ)の響(ひゞき)あり

うたへ浮世(うきよ)の一ふしは
笛の夢路(ゆめぢ)のものぐるひ

くるしむなかれ吾友(わがとも)よ
しばしは笛の音(ね)に歸(かへ)れ

落つる涙をぬぐひきて
靜かにきゝね吾笛を

おくめ

こひしきまゝに家を出で
こゝの岸よりかの岸へ
越えましものと來て見れば
千鳥鳴くなり夕まぐれ

こひには親も捨てはてて
やむよしもなき胸の火や
鬢の毛を吹く河風よ
せめてあはれと思へかし

河波暗く瀬を早み
流れて巖に碎くるも
君を思へば絶間なき
戀の火炎に乾くべし

きのふの雨の小休なく
水嵩や高くまさるとも
よひよひになくわがこひの
涙の瀧におよばじな

しりたまはずやわがこひは
花鳥の繪にあらじかし
空鏡の印象砂の文字
梢の風の音にあらじ

しりたまはずやわがこひは
雄々しき君の手に觸れて
嗚呼口紅をその口に
君にうつさでやむべきや

戀は吾身の社にて
君は社の神なれば
君の祭壇の上ならで
なににいのちを捧げまし

碎かば碎け河波よ
われに命はあるものを
河波高く泳ぎ行き
ひとりの神にこがれなむ

心のみかは手も足も
吾身はすべて火炎なり
思ひ亂れて嗚呼戀の
千筋の髮の波に流るゝ

おつた

花仄見ゆる春の夜の
すがたに似たる吾命
朧々に父母は
二つの影と消えうせて
世に孤児の吾身こそ
影より出でし影なれや
たすけもあらぬ今は身は
若き聖に救はれて
人なつかしき前髪の
處女とこそはなりにけれ
若き聖ののたまはく
時をし待たむ君ならば
かの柿の實をとるなかれ
かくいひたまふうれしさに
こととしの秋もはや深し
まづその秋を見よやとて
聖に柿をすゝむれば
その口唇にふれたまひ
かくも色よき柿ならば
などかは早くわれに告げこぬ
若き聖ののたまはく
人の命の惜しからば
嗚呼かの酒を飲むなかれ
かくいひたまふうれしさに
酒なぐさめの一つなり
まづその春を見よやとて
聖に酒をすゝむれば
夢の心地に醉ひたまひ
かくも樂しき酒ならば
などかは早くわれに告げこぬ
若き聖ののたまはく
道行き急ぐ君ならば
迷ひの歌をきくなかれ
かくいひたまふうれしさに
歌も心の姿なり
まづその聲をきけやとて
一ふしうたひいでければ
聖は魂も醉ひたまひ
かくも樂しき歌ならば
などかは早くわれに告げこぬ
若き聖ののたまはく
まことをさぐる吾身なり

道の迷となるなかれ
かくいひたまふうれしさに
情(なさけ)も道の一つなり
かゝる思(おもひ)を見よやとて
わがこの胸に指ざせば
聖(ひじり)は早く戀ひわたり
かくも樂しき戀ならば
などかは早くわれに告げこぬ

それ秋の日の夕まぐれ
そゞろあるきのこゝろなく
ふと目に入るを手にとれば
雪(ゆき)より白き小石(こいし)なり
若き聖(わかひじり)ののたまはく
智恵(ちえ)の石とやこれぞこの
あまりに惜しき色なれば
人に隱(かく)して今も放(はな)たじ

おきく

くろかみながく
　やはらかき
をんなごゝろを
　たれかしる

をとこのかたる
　ことのはを
まことともおもふ
　ことなかれ

をとめごゝろの
　あさくのみ
いひもつたふる
　をかしさや

みだれてながき
　鬢の毛を
黄楊の小櫛に
　かきあげよ

あゝ月ぐさの
　きえぬべき
こひもするとは
　たがことば

こひて死なむと
　よみいでし
あつきなさけは
　誰がうたぞ

みちのためには
　ちをながし
くにには死ぬる
　をとこあり

治兵衛はいづれ
　戀か名か
忠兵衛も名の
　ために果つ

あゝむかしより
　こひ死にし
をとこのありと
　しるや君

をんなごゝろは
　いやさらに
ふかきなさけの
　こもるかな

小春はこひに
　ちをながし
梅川こひの
　ために死ぬ

お七はこひの
　ために焼け
高尾はこひの
　ために果(は)つ

かなしからずや
　清姫は
蛇(へび)となれるも
　こひゆゑに

やさしからずや
　佐容姫は
石となれるも
　こひゆゑに

をとこのこひの
　たはふれは
たびにすてゆく
　なさけのみ

こひするなかれ
　をとめごよ
かなしむなかれ
　わがともよ

こひするときと
　かなしみと
いづれかながき
　いづれみじかき

醉歌

旅と旅との君や我
君と我とのなかなれば
醉うて袂の歌草(うたぐさ)を
醒めての君に見せばやな

若き命も過ぎぬ間(ま)に
樂しき春は老いやすし
誰(た)が身にもてる寶ぞや
君くれなゐのかほばせは

君がまなこに涙あり
君が眉には憂愁(うれひ)あり
堅く結べるその口に
それ聲も無きなげきあり

名もなき道を説くなかれ
名もなき旅を行くなかれ
甲斐なきことをなげくより
來(う)りて美き酒に泣け

光もあらぬ春の日の
獨りさみしきものぐるひ
悲しき味の世の智惠に
老いにけらしな旅人よ

心の春の燭火(ともしび)に
若き命を照らし見よ
さくまを待たで花散らば
哀(かな)しからずや君が身は

わきめもふらで急ぎ行く
君の行衛はいづこぞや
琴花酒(ことはなさけ)のあるものを
とゞまりたまへ旅人よ

哀歌

中野逍遙をいたむ

『秀才香骨幾人憐、秋入長安夢愴然、琴臺舊譜壚前柳、風流銷盡二千年』、これ中野逍遙が秋怨十絶の一なり。逍遙字は威卿、小字重太郎、豫州宇和島の人なりといふ。文科大學の異材なりしが年僅かに二十七にしてうせぬ。逍遙遺稿正外二篇、みな紅心の餘唾にあらざるはなし。左に掲ぐるはかれの清怨を寫せしもの、『寄語殘月休長嘆、我輩亦是艶生涯』、合せかゝげてこの秀才を追慕するのこゝろをとぶむ。

思君九首　中野逍遙

思君我心傷　思君我容瘁
中夜坐松蔭　露華多似涙

思君我心悄　思君我腸裂
昨夜涕涙流　今朝盡成血

示君錦字詩　寄君鴻文册
忽覺筆端香　窻外梅花白

爲君調綺羅　爲君築金屋
中有鴛鴦圖　長春夢百祿

贈君名香篋　應記韓壽恩
休將秋扇掩　明月照眉痕

贈君双臂環　寶玉價千金
一鐫不乖約　一題勿變心

訪君過臺下　清宵琴響搖
佇門不敢入　恐亂月前調

千里囀金鶯　春風吹緑野
忽發頭屋桃　似君三兩朶

嬌影三分月　芳花一朶梅
潭把花月秀　作君玉膚堆

かなしいかなや流れ行く
水になき名をしるすとて
今(いま)はた殘る歌反古(うたほご)の
ながき愁(うれ)ひをいかにせむ

かなしいかなやする墨の
いろに染めてし花の木の
君がしらべの歌の音に
薄き命のひゞきあり

かなしいかなや前の世は
みそらにかゝる星の身の
人の命のあさぼらけ
光も見せでうせにしよ

かなしいかなや同じ世に
生れいでたる身を持ちて
友の契りも結ばずに
君は早くもゆけるかな

すゞしき眼(まなこ)つゆを帯び
葡萄のたまとまがふまで
その面影をつたへては
あまりに妬(ねた)き姿かな

同じ時世(ときよ)に生れきて
同じいのちのあさぼらけ
君からくれなゐの花は散り
われ命(いのち)あり八重葎(やへむぐら)

かなしいかなやうるはしく
さきそめにける花を見よ
いかなればかくとゞまらで
待たで散るらむさける間(ま)も

かなしいかなやうるはしき
なさけもこひの花を見よ
いといと清きそのこひは
消ゆとこそ聞けいと早く

君し花とにあらねども
いな花よりもさらに花
君しこひとにあらねども
いなこひよりもさらにこひ

かなしいかなや人の世に
あまりに惜しき才(ざえ)なれば
病(やまひ)に塵(ちり)に悲(かなしみ)に
死(し)にまでそしりねたまるゝ

かなしいかなやはたとせの
ことばの海のみなれ棹
磯にくだくる高潮(たかじほ)の
うれひの花とちりにけり

かなしいかなや人の世の
きづなも捨てて嘶けば
つきせぬ草に秋は來て
聲も悲しき天の馬

かなしいかなや音(ね)を遠み
流るゝ水の岸にさく
ひとつの花に照らされて
飄(ひるがへ)り行く一葉舟(ひとはぶね)

秋思

秋は來(き)ぬ
　秋は來ぬ
一葉(ひとは)は花は露ありて
風の來て彈(ひ)く琴の音に
青き葡萄は紫の
自然の酒とかはりけり

秋は來ぬ
　秋は來ぬ
おくれさきだつ秋草(あきくさ)も
みな夕霜(ゆふじも)のおきどころ
笑ひの酒を悲みの
盃にこそつぐべけれ

秋は來ぬ
　秋は來ぬ
くさきも紅葉(もみぢ)するものを
たれかは秋に醉はざらむ
智惠あり顏のさみしさに
君笛を吹けわれはうたはむ

初戀

まだあげ初(そ)めし前髪(まへがみ)の
林檎のもとに見えしとき
前にさしたる花櫛(はなぐし)の
花ある君と思ひけり

やさしく白き手をのべて
林檎をわれにあたへしは
薄紅(うすくれなゐ)の秋の實(み)に
人こひ初(そ)めしはじめなり

わがこゝろなきためいきの
その髪の毛にかゝるとき
たのしき戀の盃(さかづき)を
君が情(なさけ)に酌みしかな

林檎畑の樹(こ)の下(した)に
おのづからなる細道(ほそみち)は
誰(た)が踏みそめしかたみぞと
問ひたまふこそうれしけれ

狐のわざ

庭にかくるゝ小狐の
人なきときに夜(よる)いでゝ
秋の葡萄の樹の影に
しのびてぬすむつゆのふさ

戀は狐にあらねども
君は葡萄にあらねども
人しれずこそ忍びいで
君をぬすめる吾心

髪を洗へば

髪を洗へば紫の
小草（をぐさ）のまへに色みえて
足をあぐれば花鳥（はなとり）の
われに隨ふ風情（ふぜい）あり

目にながむれば彩雲（あやくも）の
まきてはひらく繪巻物（ゑまきもの）
手にとる酒は美酒（うまざけ）の
若き愁（うれひ）をたゝふめり

耳をたつれば歌神（うたがみ）の
きたりて玉（たま）の簫（ふえ）を吹き
口をひらけばうたびとの
一ふしわれはこひうたふ

あゝかくまでにあやしくも
熱きこゝろのわれなれど
われをし君のこひしたふ
その涙にはおよばじな

君がこゝろは

君がこゝろは蟋蟀(こほろぎ)の
風にさそはれ鳴くごとく
朝影清(あさかげきよ)き花草(はなくさ)に
惜(を)しき涙をそゝぐらむ

それかきならす玉琴の
一つの糸のさはりさへ
君がこゝろにかぎりなき
しらべとこそはきこゆめれ

あゝなどかくは觸れやすき
君が優しき心もて
かくばかりなる吾こひに
觸れたまはぬぞ恨みなる

傘のうち

二人してさす一張(ひとはり)の
傘(かさ)に姿をつゝむとも
情(なさけ)の雨のふりしきり
かわく間(ま)もなきたもとかな

顔と顔とをうちよせて
あゆむとすればなつかしや
梅花(ばいくわ)の油黒髪(くろかみ)の
亂れて匂ふ傘(かさ)のうち

戀の一雨ぬれまさり
ぬれてこひしき夢の間(ま)や
染めてぞ燃ゆる紅絹(もみ)うらの
雨になやめる足まとひ

歌ふをきけば梅川よ
しばし情(なさけ)を捨てよかし
いづこも戀に戯(たはふ)れて
それ忠兵衛の夢がたり

こひしき雨よふらばふれ
秋の入日の照りそひて
傘(かさ)の涙を乾(ほ)さぬ間(ま)に
手に手をとりて行きて歸(かへ)らじ

秋に隠れて

わが手に植ゑし白菊の
おのづからなる時くれば
一もと花の蔭（ゆふぐれ）に
秋に隠（かく）れて窓にさくなり

知るや君

こゝろもあらぬ秋鳥(あきとり)の
聲にもれくる一ふしを
知るや君

深くも澄(す)める朝潮(あさじほ)の
底にかくるゝ眞珠(しらたま)を
知るや君

あやめもしらぬやみの夜に
靜(しづ)かにうごく星くづを
知るや君

まだ彈(ひ)きも見ぬをとめごの
胸にひそめる琴の音(ね)を
知るや君

秋風の歌

さびしさはいつともわかぬ山里に
　尾花みだれて秋かぜぞふく

しづかにきたる秋風の
西の海より吹き起り
舞ひたちさわぐ白雲の
飛びて行くへも見ゆるかな

暮影高く秋は黄の
桐の梢の琴の音に
そのおとなひを聞くときは
風のきたると知られけり

ゆふべ西風吹き落ちて
あさ秋の葉の窓に入り
あさ秋風の吹きよせて
ゆふべの鶉巣に隠る

ふりさけ見れば青山も
色はもみぢに染めかへて
霜葉をかへす秋風の
空の明鏡にあらはれぬ

清しいかなや西風の
まづ秋の葉を吹けるとき
さびしいかなや秋風の
かのもみぢ葉にきたるとき

道を傳ふる婆羅門の
西に東に散るごとく
吹き漂蕩す秋風に
飄り行く木の葉かな

朝羽うちふる鷲鷹の
明闇天をゆくごとく
いたくも吹ける秋風の
羽に聲あり力あり

見ればかしこし西風の
山の木の葉をはらふとき
悲しいかなや秋風の
秋の百葉を落すとき

人は利劍を振へども
げにかぞふればかぎりあり
舌は時世をのゝしるも
聲はたちまち滅ぶめり

高くも烈(はげ)し野も山も
息吹(いぶき)まどはす秋風よ
世をかれがれとなすまでは
吹きも休(や)むべきけはひなし

あゝうらさびし天地(あめつち)の
壺(つぼ)の中(うち)なる秋の日や
落葉と共に飄(ひるがへ)る
風の行衛(ゆくへ)を誰か知る

雲のゆくへ

庭にたちいでたゞひとり
秋海棠の花を分け
空ながむれば行く雲の
更(さら)に祕密(ひみつ)を闡(ひら)くかな

母を葬るのうた

うき雲はありともわかぬ大空の
　月のかげよりふるしぐれかな

きみがはかばに
　きゞくあり
きみがはかばに
　さかきあり

くさはにつゆは
　しげくして
おもからずやは
　そのしるし

いつかねむりを
　さめいでて
いつかへりこむ
　わがはゝよ

紅羅(あから)ひく子も
　ますらをも
みなちりひぢと
　なるものを

あゝさめたまふ
　ことなかれ
あゝかへりくる
　ことなかれ

はるははなさき
　はなちりて
きみがはかばに
　かゝるとも

なつはみだるゝ
　ほたるびの
きみがはかばに
　とべるとも

あきはさみしき
　あきさめの
きみがはかばに
　そゝぐとも

ふゆはましろに
　ゆきじもの
きみがはかばに
　こほるとも

とほきねむりの
　ゆめまくら
おそるゝなかれ
　わがはゝよ

合唱

一　暗香

はるのよはひかりはかりとおもひしを
　しろきやうめのさかりなるらむ

姉
わかきいのちの
　をしければ
やみにも春の
　香に醉はむ

せめてこよひは
　さほひめよ
はなさくかげに
　うたへかし

妹
そらもゑへりや
　はるのよは
ほしもかくれて
　みえわかず

よめにもそれと
　ほのしろく
みだれてにほふ
　うめのはな

姉
はるのひかりの
　こひしさに
かたちをかくす
　うぐひすよ

はなさへしるき
　はるのよの
やみをおそるゝ
　ことなかれ

妹
うめをめぐりて
　ゆくみづの
やみをながるゝ
　せゝらぎや
ゆめもさそはぬ

香(か)なりせば
いづれかよるに
　にほはまし

姉
こぞのこよひは
　わがともの
うすこうばいの
　そめごろも
ほかげにうつる
　さかづきを
こひのみゑへる
　よなりけり

妹
こぞのこよひは
　わがともの
なみだをうつす
　よのなごり
かげもかなしや
　木下川に
うれひしづみし
　よなりけり

姉
こぞのこよひは
　わがともの
おもひははるの
　よのゆめや
よをうきものに
　いでたまふ
ひとめをつゝむ
　よなりけり

妹
こぞのこよひは
　わがともの
そでのかすみの
　はなむしろ
ひくやことのね
　たかじほを
うつしあはせし
　よなりけり

姉
わがみぎのてに

くらぶれば
やさしきなれが
たなごゝろ

ふるればいとど
やわらかに
もゆるかあつく
おもほゆる

妹
もゆるやいかに
こよひはと
とひたまふこそ
うれしけれ

しりたまはずや
うめがかに
わがうまれてし
はるのよを

二　蓮花舟

しは〳〵もこほるゝつゆははちすはの
うきはにのみもたまりけるかな

姉
あゝはすのはな
はすのはな
かげはみえけり
いけみづに

ひとつのふねに
さをさして
うきはをわけて
こぎいでむ

妹
かぜもすゞしや
はがくれに
そこにもしろし
はすのはな

こゝにもあかき
はすばなの
みづしづかなる
いけのおも

姉

はすをやさしみ
　はなをとり
そでなひたしそ
　いけみづに
ひとめもはぢよ
　はなかげに
なれが乳房（ちぶさ）の
　あらはるゝ

妹

ふかくもすめる
　いけみづの
葉にすれてゆく
　みなれざを
なつぐもゆけば
　かげみえて
はなよりはなを
　わたるらし

姉

荷葉にうたひ
　ふねにのり
はなつみのする
　なつのゆめ
はすのはなふね
　さをとめて
なにをながむる
　そのすがた

妹

なみしづかなる
　はなかげに
きみのかたちの
　うつるかな
きみのかたちと
　なつばなと
いづれうるはし
　いづれやさしき

三　葡萄の樹のかげ

はるあきにおもひみたれてわきかねつ
　ときにつけつゝうつるこゝろは

妹

たのしからずや
　はなやかに
あきはいりひの
　てらすとき

たのしからずや
　ぶだうばの
はごしにくもの
　かよふとき

姉
やさしからずや
　むらさきの
ぶだうのふさの
　かゝるとき

やさしからずや
　にひぼしの
ぶだうのたまに
　うつるとき

妹
かぜはしづかに
　そらすみて
あきはたのしき
　ゆふまぐれ

いつまでわかき
　をとめごの
たのしきゆめの
　われらぞや

姉
あきのぶだうの
　きのかげの
いかにやさしく
　ふかくとも

てにてをとりて
　かげをふむ
なれとわかれて
　なにかせむ

妹
げにやかひなき
　くりごとも
ぶだうにしかじ
　ひとふさの
われにあたへよ

ひとふさを
そこにかゝれる
むらさきの

姉

われをしれかし
えだたかみ
とゞかじものを
かのふさは

はかげのたまに
手はふれで
わがさしぐしの
おちにけるかな

四　高樓

わかれゆくひとををしむとこよひより
とほきゆめちにわれやまとはむ

妹

とほきわかれに
たへかねて
このたかどのに
のぼるかな

かなしむなかれ
わがあねよ
たびのころもを
とゝのへよ

姉

わかれといへば
むかしより
このひとのよの
つねなるを

ながるゝみづを
ながむれば
ゆめはづかしき
なみだかな

妹

したへるひとの
もとにゆく
きみのうへこそ
たのしけれ

ふゆやまこえて

きみゆかば
なにをひかりの
わがみぞや

姉
あゝはなとりの
いろにつけ
ねにつけわれを
おもへかし

けふわかれては
いつかまた
あひみるまでの
いのちかも

妹
きみがさやけき
めのいろも
きみくれなゐの
くちびるも

きみがみどりの
くろかみも
またいつかみむ
このわかれ

姉
なれがやさしき
なぐさめも
なれがたのしき
うたごゑも

なれがこゝろの
ことのねも
またいつきかむ
このわかれ

妹
きみのゆくべき
やまかはは
おつるなみだに
みえわかず

そでのしぐれの
ふゆのひに
きみにおくらむ
はなもがな

姉
そでにおほへる

うるはしき
ながかほばせを
あげよかし

ながくれなゐの
かほばせに
ながるゝなみだ
われはぬぐはむ

ゆふぐれしづかに

ゆふぐれしづかに
　ゆめみむとて
よのわづらひより
　しばしのがる

きみよりほかには
　しるものなき
花かげにゆきて
　こひを泣きぬ

すぎこしゆめぢを
　おもひみるに
こひこそつみなれ
　つみこそこひ

いのりもつとめも
　このつみゆゑ
たのしきそのへと
　われはゆかじ

なつかしき君と
　てをたづさへ
くらき冥府(よみ)まで
　かけりゆかむ

月夜

しづかにてらせる
　月のひかりの
などか絶間なく
　ものおもはする
さやけきそのかげ
　こゑはなくとも
みるひとの胸に
　忍び入るなり
なさけは説(と)くとも
　なさけをしらぬ
うきよのほかにも
　朽ちゆくわがみ
あかさぬおもひと
　この月かげと
いづれか聲なき
　いづれかなしき

強敵

一つの花に蝶と蜘蛛
小蜘蛛は花を守(まも)り顔
小蝶は花に醉ひ顔に
舞へども舞へどもすべぞなき

花は小蜘蛛のためならば
小蝶の舞(まひ)をいかにせむ
花は小蝶のためならば
小蜘蛛の糸をいかにせむ

やがて一つの花散りて
小蜘蛛はそこに眠れども
羽翼(つばさ)も輕き小蝶こそ
いづこともなくうせにけれ

別離

人妻をしたへる男の山に登り其女の家を望み見てうたへるうた

誰かとどめむ旅人の
あすは雲間に隠るゝを
誰か聞くらむ旅人の
あすは別れと告げましを

清き戀とや片し貝
われのみものを思ふより
戀はあふれて濁るとも
君に涙をかけましを

人妻戀ふる悲しさを
君がなさけに知りもせば
せめてはわれを罪人と
呼びたまふこそうれしけれ

あやめもしらぬ憂しや身は
くるしきこひの牢獄より
罪の鞭責をのがれいで
こひて死なむと思ふなり

誰かは花をたづねざる
誰かは色彩に迷はざる
誰かは前にさける見て
花を摘まむと思はざる

戀の花にも戯るゝ
嫉妬の蝶の身ぞつらき
二つの羽もをれをれて
翼の色はあせにけり

人の命を春の夜の
夢といふこそうれしけれ
夢よりもいやいや深き
われに思ひのあるものを

梅の花さくころほひは
蓮さかばやと思ひわび
蓮の花さくころほひは
萩さかばやと思ふかな

待つまも早く秋は來て
わが踏む道に萩さけど
濁りて待てる吾戀は
清き怨となりにけり

望郷

寺をのがれいでたる僧のうたひし
そのうた

いざさらば
これをこの世のわかれぞと
のがれいでては住みなれし
御寺(みてら)の藏裏(くり)の白壁(しらかべ)の
眼(め)にもふたゝび見ゆるかな

いざさらば
住めば佛のやどりさへ
火炎(ほのほ)の宅(いへ)となるものを
なぐさめもなき心より
流れて落つる涙かな

いざさらば
心の油濁るとも
ともしびたかくかきおこし
なさけは熱くもゆる火の
こひしき塵(ちり)にわれは燒けなむ

かもめ

波に生れて波に死ぬ
情(なさけ)の海のかもめどり
戀の激波(おほなみ)たちさわぎ
夢むすぶべきひまもなし

闇き潮(うしほ)の驚きて
流れて歸るわだつみの
鳥の行衞も見えわかぬ
波にうきねのかもめどり

流星

門(かど)にたち出でたゞひとり
人待ち顔のさみしさに
ゆふべの空をながむれば
雲の宿りも捨てはてて
何かこひしき人の世に
流れて落つる星一つ

君と遊ばむ

君と遊ばむ夏の夜の
青葉の影の下すゞみ
短かき夢は結ばずも
せめてこよひは歌へかし

雲となりまた雨となる
晝の愁ひはたえずとも
星の光をかぞへ見よ
樂みのかず夜(よ)は盡きじ

夢かうつゝか天の川
星に假寢の織姫の
ひゞきもすみてこひわたる
梭の遠音を聞かめやも

晝の夢

花橘の袖の香の
みめうるはしきをとめごは
眞晝（まひる）に夢を見てしより
さめて忘るゝ夜のならひ
白日（まひる）の夢のなぞもかく
忘れがたくはありけるものか

ゆめと知りせばなまなかに
さめざらましを世に出でて
うらわかぐさのうらわかみ
何をか夢の名殘ぞと
問はば答へむ目さめては
熱き涙のかわく間もなし

四つの袖

をとこの氣息(いき)のやはらかき
お夏の髪にかゝるとき
をとこの早きためいきの
霰(あられ)のごとくはしるとき

をとこの熱(あつ)き手の掌(ひら)の
お夏の手にも觸るゝとき
をとこの涙ながれいで
お夏の袖にかゝるとき

をとこの黒き目のいろの
お夏の胸に映(うつ)るとき
をとこの紅(あか)き口脣(くちびる)の
お夏の口にもゆるとき

人こそしらね嗚呼戀の
ふたりの身より流れいで
げにこがるれど慕へども
やむときもなき清十郎

雞

花によりそふ※(にはとり)の
夫(つま)よ妻鳥(めどり)よ燕子花
いづれあやめとわきがたく
さも似つかしき風情(ふぜい)あり

姿やさしき牝※(めんどり)の
かたちを恥づるこゝろして
花に隱るゝありさまに
品かはりたる夫鳥(つまどり)や

雄々しくたけき雄※(をんどり)の
とさかの色も艶(つや)にして
黄なる口嘴(くちばし)脚蹴爪(あしけづめ)
尾はしだり尾のながながし

問うても見まし誰(た)がために
よそほひありく夫鳥(つまどり)よ
妻守(つまも)るためのかざりにと
いひたげなるぞいぢらしき

畫にこそかけれ花鳥(はなとり)の
それにも通ふ一つがひ
霜に侘寢の朝ぼらけ
雨に入日の夕まぐれ

空に一つの明星の
闇行く水に動くとき
日を迎へむと※(にはとり)の
夜(よる)の使を音(ね)にぞ鳴く

露けき朝の明けて行く
空のながめを誰(たれ)か知る
燃ゆるがごとき紅(くれなゐ)の
雲のゆくへを誰(たれ)か知る

闇もこれより隣なる
聲ふりあげて鳴くときは
人の長眠(ねむり)のみなめざめ
夜(よ)は日に通ふ夢まくら

明けはなれたり夜(よ)はすでに
いざ妻鳥(つまどり)と巢を出でて
餌(ゑ)をあさらむと野に行けば
あなあやにくのものを見き

見しらぬ※の音も高に
あしたの空に鳴き渡り
草かき分けて來るはなぞ
妻戀ふらしや妻鳥を

ねたしや露に羽ぬれて
朝日にうつる影見れば
雄※に惜しき白妙の
雪をあざむくばかりなり

力あるらし聲たけき
敵のさまを懼れてか
聲色あるさまに羞ぢてかや
妻鳥は花に隱れけり

かくと見るより堪へかねて
背をや高めし夫鳥は
羽がきも荒く飛び走り
蹴爪に土をかき狂ふ

筆毛のさきも逆立ちて
血潮にまじる眼のひかり
二つの※のすがたこそ
是おそろしき風情なれ

妻鳥は花を馳け出でて
爭闘分くるひまもなみ
たがひに蹴合ふ蹴爪には
火焔もちるとうたがはる

蹴るや左眼の的それて
羽に血しほの夫鳥は
敵の右眼をめざしつゝ
爪も折れよと蹴返しぬ

蹴られて落つるくれなゐの
血汐の花も地に染みて
二つの※の目もくるひ
たがひにひるむ風情なし

そこに聲あり涙あり
爭ひ狂ふ四つの羽
血潮に滑りし夫鳥の
あな仆れけむ聲高し

一聲長く悲鳴して
あとに仆るゝ夫鳥の
羽は血汐の朱に染み
あたりにさける花紅し

あゝあゝ熱き涙かな
あるに甲斐なき妻鳥は
せめて一聲鳴けかしと
屍(かばね)に嘆くさまあはれ

なにとは知らぬかなしみの
いつか恐怖(おそれ)と變りきて
思ひ亂れて音(ね)をのみぞ
鳴くや妻鳥(めどり)の心なく

我を戀ふらし音(ね)にたてて
姿も色もなつかしき
花のかたちと思ひきや
かなしき敵(てき)とならむとは

花にもつるゝ蝶あるを
鳥に縁(えにし)のなからめや
おそろしきかな其の心
なつかしきかな其の情(なさけ)

紅(あけ)に染(そ)みたる草見れば
鳥の命のもろきかな
火よりも燃ゆる戀見れば
敵(てき)のこゝろのうれしやな

見よ動きゆく大空の
照る日も雲に薄らぎて
花に色なく風吹けば
野はさびしくも變りけり

かなしこひしの夫鳥(つまどり)の
冷えまさりゆく其姿
たよりと思ふ一ふしの
いづれ妻鳥(めどり)の身の末ぞ

恐怖(おそれ)を抱く母と子が
よりそふごとくかの敵(てき)に
なにとはなしに身をよする
妻鳥(めどり)のこゝろあはれなれ

あないたましのながめかな
さきの樂しき花ちりて
空色暗く一彩毛(ひとはけ)の
雲にかなしき野のけしき

行きてかへらぬ鳥はいざ
夫(つま)か妻鳥(めどり)か燕子花
いづれあやめを踏み分けて
野末を歸る二羽の※(とり)

林の歌

力を刻む木匠(きざ)(こだくみ)の
うちふる斧のあとを絶え
春の草花彫刻(くさばなほりもの)の
鑿(のみ)の韻(にほひ)もとゞめじな
いろさまざまの春の葉に
青一筆(あをひとふで)の痕(あと)もなく
千枝(ちえ)にわかるゝ赤樟(あかくす)も
おのづからなるすがたのみ
檜(ひのき)は荒し杉直し
五葉は黒し椎の木の
枝をまじふる白樫や
樗(あふち)は莖をよこたへて
枝と枝とにもゆる火の
なかにやさしき若楓

山精
ひとにしられぬ
たのしみの
ふかきはやしを
たれかしる

ひとにしられぬ
はるのひの
かすみのおくを
たれかしる

木精
はなのむらさき
はのみどり
うらわかぐさの
のべのいと

たくみをつくす
大機(おほはた)の
梭(をさ)のはやしに
きたれかし

山精
かのもえいづる
くさをふみ
かのわきいづる
みづをのみ

かのあたらしき
はなにゑひ

はるのおもひの
なからずや

木精

ふるきこころもを
ぬぎすてて
はるのかすみを
まとへかし

なくうぐひすの
ねにいでて
ふかきはやしに
うたへかし

あゆめば蘭の花を踏み
ゆけば楊梅(やまもゝ)袖に散り
袂にまとふ山葛の
葛のうら葉をかへしては
女蘿(ひかげ)の蔭のやまいちご
色よき實こそ落ちにけれ
岡やまつゞき隅々(くまぐま)も
いとなだらかに行き延びて
ふかきはやしの谷あひに
亂れてにほふふぢばかま
谷に花さき谷にちり

人にしられず朽つるめり
せまりて暗き峽(はざま)より
やゝひらけたる深山木(みやまぎ)の
春は木枝(こえだ)のたゝずまひ
しげりて廣き熊笹の
葉末をふかくかきわけて
谷のかなたにきて見れば
いづくに行くか瀧川よ
聲もさびしや白糸の
青き巖(いはほ)に流れ落ち
若き猿(ましら)のためにだに
音(おと)をとゞむる時ぞなき

山精

ゆふぐれかよふ
たびびとの
むねのおもひを
たれかしる

友にもあらぬ
やまかはの
はるのこゝろを
たれかしる

木精

夜(よ)をなきあかす
かなしみの
まくらにつたふ
なみだこそ

ふかきはやしの
たにかげの
そこにながるゝ
しづくなれ

山精
鹿はたふるゝ
たびごとに
妻こふこひに
かへるなり

のやまは枯るゝ
たびごとに
ちとせのはるに
かへるなり

木精
ふるきおちばを
やはらかき
青葉のかげに
葬れよ

ふゆのゆめぢを
さめいでて
はるのはやしに
きたれかし

今しもわたる深山(みやま)かぜ
春はしづかに吹きかよふ
林の簫(せう)の音(ね)をきけば
風のしらべにさそはれて
みれどもあかぬ白妙の
雲の羽袖の深山木の
千枝(ちえだ)にかゝりたちはなれ
わかれ舞ひゆくすがたかな
樹々(きぎ)をわたりて行く雲の
しばしと見ればあともなき
高き行衛にいざなはれ
千々にめぐれる巌影(いはかげ)の
花にも迷ひ石に倚り
流るゝ水の音をきけば
山は危ふく石わかれ
削りてなせる青巌(あをいは)に
砕けて落つる飛潭(たきみづ)の
湧きくる波の瀬を早み

花やかにさす春の日の
光炯(ひかり)照(て)りそふ水けぶり
獨り苔むす岩を攀ぢ
ふるふあゆみをふみしめて
浮べる雲をうかゞへば
下にとゞろく飛潭(たきみづ)の
澄むいとまなき岩波は
落ちていづくに下るらむ

山精
なにをいざよふ
むらさきの
ふかきはやしの
はるがすみ

なにかこひしき
いはかげを
ながれていづる
いづみがは

木精
かくれてうたふ
野の山の
こゑなきこゑを
きくやきみ

つゝむにあまる
はなかげの
水のしらべを
しるやきみ

山精
あゝながれつゝ
こがれつゝ
うつりゆきつゝ
うごきつゝ

あゝめぐりつゝ
かへりつゝ
うちわらひつゝ
むせびつゝ

木精
いまひのひかり
はるがすみ
いまはなぐもり
はるのあめ

あゝあゝはなの
つゆに醉ひ

ふかきはやしに
うたへかし

ゆびをりくればいつたびも
かはれる雲をながむるに
白きは黄なりなにをかも
もつ筆にせむ色彩(いろあや)の
いつしか淡く茶を帯びて
雲くれなゐとかはりけり
あゝゆふまぐれわれひとり
たどる林もひらけきて
いと静かなる湖の
岸邊にさける花躑躅
うき雲ゆけばかげ見えて
水に沈める春の日や
それ紅(くれなゐ)の色染めて
雲紫となりぬれば
かげさへあかき水鳥の
春のみづうみ岸の草
深き林や花つゝじ
迷ふひとりのわがみだに
深紫(ふかむらさき)の紅(くれなゐ)の
彩(あや)にうつろふ夕まぐれ

一葉舟より

明治三十年――同三十一年

（仙臺及び東京にて）

鷲の歌

みるめの草は青くして海の潮の香ににほひ
流れ藻の葉はむすぼれて蜑の小舟にこがるゝも
あしたゆふべのさだめなき大龍神の見る夢の
闇きあらしに驚けば海原とくもかはりつゝ

とくたちかへれ夏波に友よびかはす濱千鳥
もしほやく火はきえはてて岩にひそめるかもめどり
蜑は苦やに舟は磯いそうちよする波ぎはの
削りて高き巌角にしばし身をよす二羽の鷲

いかづちの火の岩に落ち波間に落ちて消ゆるまも
寝みだれ髪か黒雲の風にふかれつそらに飛び
葡萄の酒の濃紫いろこそ似たれ荒波の
波のみだれて狂ひよるひゝきの高くすさまじや

翼の骨をそばだててすがたをつゝむ若鷲の
身は覆羽やさごろもや腋羽のうちにかくせども
見よ老鷲はそこ白く赤すぢたてる大爪に
岩をつかみて中高き頭靜かにながめけり

げに白髪のものゝふの劍の霜を拂ふごと
唐藍の花ますらをのかの青雲を慕ふごと
黄葉の影に啼く鹿の谷間の水に喘ぐごと
眼鋭く老鷲は雲の行くへをのぞむかな

わが若鷲はうちひそみわが老鷲はたちあがり
小河に映る明星の澄めるに似たる眼して
黒雲の行く大空のかなたにむかひうめきしが
いづれこゝろのおくれたり高し烈しとさだむべき

わが若鷲は琴柱尾や胸に文なす鷸の斑の
承毛は白く柔和に谷の落し羽飛ぶときも
湧きて流るゝ眞清水の水に翼をうちひたし
このめる蔭は行く春のなごりにさける花躑躅

わが老鷲は肩剛く胸腹廣く溢れいで
烈しき風をうち凌ぐ羽は著くもあらはれて
藤の花かも胸の斑や髀に甲をおくごとく
鳥の命の戰ひに翼にかゝる老の霜

げにいかめしきものゝふの盾にもいづれ翼をば
張りひろげたる老鷲のふたゝびみたび羽ばたきて
踴れる胸は海潮の湧きつ流れつ鳴るごとく
力あふれて空高く舞ひたちあがるすがたかな

黒岩苴の岩ばなに生ふにも似るか若鷲の
巌角ふかく身をよせて飛ぶ老鷲をうかゞふに
紋は花菱舞ひ扇ひらめきかへる疾風の
わが老鷲を吹くさまは一葉を振るに似たりけり

たゝかふためにうまれては羽を剣の老鷲の
うたむかたむと小休なき熱き胸より吹く氣息は
色くれなゐの火炎かもげに悲痛の湧き上り
勁き翼をひるがへしかの天雲を凌ぎけり

光を慕ふ身なれども運命かなしや老鳥の
一こゑ深き苦悶のおとをみそらに殘しおき
金絲の縫の黒繻子の帶かとぞ見る黒雲の
羽袖のうちにつゝまれて姿はいつか消えにけり

あゝさだめなき大空のけしきのとくもかはりゆき
闇きあらしのをさまりて光にかへる海原や
細くかゝれる彩雲はゆかりの色の濃紫
薄紫のうつろひに樂しき園となりけらし

命を岩につなぎては細くも絲をかけとめて
腋羽につゝむ頭をばうちもたげたる若鷲の
鉤にも似たる爪先の雨にぬれたる岩ばなに
かたくつきたる一つ羽はそれも名殘か老鷲の

霜ふりかゝる老鷲の一羽をくはへ眺むれば
夏の光にてらされて岩根にひゞく高潮の
碎けて深き海原の岩角に立つ若鷲は
日影にうつる雲さして行くへもしれず飛ぶやかなたへ

白磁花瓶賦

みしやみぎはの白あやめ
はなよりしろき花瓶(はながめ)を
いかなるひとのたくみより
うまれいでしとしるやきみ
瓶(かめ)のすがたのやさしきは
根ざしも清き泉より
にほひいでたるしろたへの
こゝろのはなと君やみむ

さばかり清きたくみぞと
いひたまふこそうれしけれ
うらみわびつるわが友の
うきなみだよりいでこしを
ゆめにたはふれ夢に酔ひ
さむるときなきわが友の
名殘は白き花瓶(はながめ)に
あつきなみだの殘るかな

にごりをいでてさくはなに
にほひありとなあやしみそ
光(ひかり)は高き花瓶(はながめ)に
戀の嫉妬(ねたみ)もあるものを

命運(さだめ)をよそにかげろふの
きゆるためしぞなしといへ
あまりに薄き縁(えにし)こそ
友のこのよのいのちなれ

やがてさかえむゆくすゑの
ひかりも待たで夏の夜の
短かき夢は燭火(ともしび)の
花と散りゆきはかなさや

つゆもまだひぬみどりばの
しげきこずゑのしたかげに
ほとゝぎすなく夏のひの
もろ葉がくれの青梅(あをうめ)も

夏の光のかゞやきて
さつきの雨のはれわたり
黄金(こがね)いろづく梅が枝(え)に
たのしきときやあるべきを

胸の青葉のうらわかみ
朝露(あさつゆ)しげきこずゑより
落ちてくやしき青梅(あをうめ)の
實(み)のひとつなる花瓶(はながめ)よ

いのちは薄き蝉の羽の
ひとへごろものうらもなく
はじめて友の戀歌(こひうた)を
花影(はなかげ)にきてうたふとき

緑のいろの夏草の
あしたの露にぬるゝごと
深くすゞしきまなこには
戀の雫のうるほひき

影を映(うつ)してさく花の
流るゝ水を慕ふごと
なさけをふくむ口唇に
からくれなゐの色を見き

をとめごゝろを眞珠(しらたま)の
藏(くら)とは友の見てしかど
寶(たから)の胸をひらくべき
戀の鍵(かぎ)だになかりしか

いとけなきかなひとのよに
智恵ありがほの戀なれど
をとめごゝろのはかなさは
友の得しらぬ外なりき

あひみてのちはとこしへの
わかれとなりし世のなごり
かなしきゆめと思ひしを
われや忘れじ夏の夜半(よは)

月はいでけり夏の夜の
青葉の蔭にさし添ひて
あふげば胸に忍び入る
ひかりのいろのさやけさや

ゆめにゆめ見るこゝちして
ふたりの膝をうち照らす
月の光にさそはれつ
しづかに友のうたふうた

たれにかたらむ
わがこゝろ
たれにかつげむ
このおもひ

わかきいのちの
あさぼらけ
こゝろのはるの
たのしみよ

などいたましき
かなしみの
ゆめとはかはり
はてつらむ

こひはにほへる
むらさきの
さきてちりぬる
はななるを

あゝかひなしや
そのはなの
ゆかしかるべき
かをかげば

わがくれなゐの
かほばせに
とゞめもあへぬ
なみだかな

くさふみわくる
こひつじよ
なれものずゑに
まよふみか

さまよひやすき
たびびとよ
なあやまりそ
ゆくみちを

龍(たつ)を刻みし宮柱(みやばしら)
ふとき心はありながら
薄き命のはたとせの
名殘は白き瓶(かめ)ひとつ

たをらるべきをいのちにて
はなさくとにはあらねども
朝露(あさつゆ)おもきひとえだに
うれひをふくむ花瓶(はながめ)や

あゝあゝ清き白雪(しらゆき)は
つもりもあへず消ゆるごと
なつかしかりし友の身は
われをのこしてうせにけり

せめては白き花瓶（はながめ）よ
消えにしあとの野の花の
色にもいでよわが友の
いのちの春の雪の名残を

銀河

天の河原を
　ながむれば
星の力は
　おとろへて
遠きむかしの
　ゆめのあと
こゝにちとせを
　すぎにけり

そらの泉を
　よのひとの
汲むにまかせて
　わきいでし
天の河原は
　かれはてて
水はいづこに
　うせつらむ

ひゞきをあげよ
　織姫よ

みどりの空は
　かはらねど
ほしのやどりの
　今ははた
いづこに梭の
　音をきかむ

あゝひこぼしも
　織姫も
今はむなしく
　老い朽ちて
夏のゆふべを
　かたるべき
みそらに若き
　星もなし

きりぎりす

去年(こぞ)蔦の葉の
　かげにきて
うたひいでしに
　くらぶれば
ことしも同じ
　しらべもて
かはるふしなき
　きりぎりす

耳なきわれを
　とがめそよ
うれしきものと
　おもひしを
自然(しぜん)のうたの
　かくまでに
舊(ふる)きしらべと
　なりけるか

同じしらべに
　たへかねて

草と草との
　花を分け
聲あるかたに
　たちよりて
蟲のこたへを
　もとめけり

花をへだてて
　きみがため
聞くにまかせて
　うたへども
うたのこゝろの
　かよはねば
せなかあはせの
　きりぎりす

春やいづこに

かすみのかげにもえいでし
糸の柳にくらぶれば
いまは小暗き木下闇（こしたやみ）
あゝ一時（ひととき）の
春やいづこに

色をほこりしあさみどり
わかきむかしもありけるを
今はしげれる夏の草
あゝ一時（ひととき）の
春やいづこに

梅も櫻もかはりはて
枝は緑（みどり）の酒のごと
醉うてくづるゝ夏の夢
あゝ一時（ひととき）の
春やいづこに

夏草より

明治三十一年

（木曾福島にて）

小兎のうた

ゆきてとらへよ
　大麥の
畠(はた)にかくるゝ
　小兎(こうさぎ)を

われらがつくる
　麥畠(むぎはた)の
青くさかりと
　なるものを

たわにみのりし
　穗のかげを
みだすはたれの
　たはむれぞ

麥まきどりの
　きなくより
丸根(まるね)に雨の
　かゝるまで

朝露(あさつゆ)しげき
　星影(ほしかげ)に
片(かた)さがりなき
　鍬(くは)まくら

ゆふづゝ沈む
　山のはの
こだまにひゞく
　はたけうち

われらがつくる
　麥畠(むぎはた)の
青くさかりと
　なるものを

ゆきてとらへよ
　大麥の
畠にかくるゝ
　小兎を

晩春の別離

時は暮れ行く春よりぞ
また短きはなかるらむ
恨(うらみ)は友の別れより
さらに長きはなかるらむ

君を送りて花近き
高樓(たかどの)までもきて見れば
緑に迷ふ鶯は
霞空(かすめるそら)しく鳴きかへり
白き光は佐保姫の
春の車駕(くるま)を照らすかな

これより君は行く雲と
ともに都を立ちいでて
懐(おも)へば琵琶の湖(みづうみ)の
岸の光にまよふとき
東膽吹(いぶき)の山高く
西には比叡比良の峯
日は行き通ふ山々の
深きながめをふしあふぎ
いかにすぐれし想(おもひ)をか
沈める波に湛(たた)ふらむ

流れは空し法皇の
夢杳(ゆめはる)かなる鴨の水
水にうつろふ山城の
みやび都(みやこ)行く春の
霞めるすがた見つくして
畿内に迫る伊賀伊勢の
鈴鹿の山の波遠く
海に落つるを望むとき
いかに萬(よろづ)の恨(うらみ)をば
空行く鷲に窮むらむ

春去り行かば青丹よし
奈良の都に尋ね入り
としつき君がこひ慕ふ
御堂(みだう)のうちに遊ぶとき
古き藝術(たくみ)の花の香(か)の
伽藍(がらん)の壁(かべ)に遺りなば
いかに韻(にほひ)を身にしめて
深き思に沈むらむ

さては秋津の島が根の
南の翼紀(つばさ)の國を

回りて進む黒潮(くろしほ)の
鳴門に落ちて行くところ
天際(あまぎは)遠く白き日の
光を泄らす雲裂けて
目にはるかなる遠海の
波の踴るを望むとき
いかに胸うつ音(おと)高く
君が血潮のさわぐらむ

または名に負ふ歌枕
波に千とせの色映る
明石の浦のあさぼらけ
松萬代(よろづよ)の音(ね)に響く
舞子の濱のゆふまぐれ
もしそれ海の雲落ちて
淡路の島の影暗く
狹霧のうちに鳴き通ふ
千鳥の聲を聞くときは
いかに浦邊にさすらひて
遠き古(むかし)を忍ぶらむ

げに君がため山々は
雲を停めむ浦々は
磯に流るゝ白波(しらなみ)を
揚げむとすらむよしさらば

旅路(たびぢ)はるかに野邊行かば
野邊のひめごと森行かば
森のひめごとさぐりもて
高きに登り天地(あめつち)の
もなかに遊べ大川(おほかは)の
流れを窮(きは)め山々の
神をも呼ばひ谷々の
鬼をも起し歌人(うたびと)の
魂(たま)をも遠く返(かへ)しつゝ
清(すゞ)しき聲をうちあげて
朽(く)ちせぬ琴をかき鳴らせ

あゝ歌神(うたがみ)の吹く氣息(いき)は
絶えてさびしくなりにけり
ひゞき空しき天籟は
いづくにかある

九つの
藝術(たくみ)の神のかんづまり
かんさびませしとつくにの
阿典(あぜん)の宮殿(みや)の玉垣も
今はうつろひかはりけり
草の緑はグリイスの
牧場(まきば)を今も覆ふとも
みやびつくせしいにしへの

笛のしらべはいづくぞや
かのバビロンの水青く
千歳(ちとせ)の色をうつすとも
柳に懸けしいにしへの
琴は空しく流れけり

げにや大雅(みやび)をこひ慕ふ
君にしあれば君がため
藝術(たくみ)の天(そら)に懸る日も
時を導く星影も
いづれ行くへを照らしつゝ
深き光を示すらむ
さらば名残はつきずとも
袂を別つ夕まぐれ
見よ影深き欄干(おばしま)に
煙をふくむ藤の花
北行く鴈は大空(おほそら)の
霞に沈み鳴き歸り
彩(あや)なす雲も愁(うれ)ひつゝ
君を送るに似たりけり

あゝいつかまた相逢うて
もとの契りをあたゝめむ
梅も櫻も散りはてて
すでに柳はふかみどり

人はあかねど行く春を
いつまでこゝにとゞむべき
われに惜むな家づとの
一枝の筆の花の色香を

うぐひす

さばれ空しきさへづりは
雀の群にまかせてよ
うたふをきくや鶯の
すぎこしかたの思ひでを

はじめて谷を出でしとき
朔風寒く霰ふり
うちに望みはあふるれど
行くへは雲に隠れてき

露は緑の羽を閉ぢ
霜は翅の花となる
あしたに野邊の雪を噛み
ゆふべに谷の水を飲む

さむさに爪も凍りはて
絶えなむとするたびごとに
また新たなる世にいでて
くしきいのちに歸りけり

あゝ枯菊に枕して
冬のなげきをしらざれば
誰が身にとめむ吹く風に
にほひ亂るゝ梅が香を

谷間の笹の葉を分けて
凍れる露を飲まざれば
誰が身にしめむ白雪の
下に萌え立つ若草を

げに春の日ののどけさは
暗くて過ぎし冬の日を
思ひ忍べる時にこそ
いや樂しくもあるべけれ

梅のこぞめの花笠を
かざしつ醉ひつうたひつゝ
さらば春風吹き來る
香の國に飛びて遊ばむ

かりがね

さもあらばあれうぐひすの
たくみの奥はつくさねど
または深山(みやま)のこまどりの
しらべのほどはうたはねど
まづかざりなき一聲(こゑ)に
涙をさそふ秋の雁(かり)

長きなげきは泄(も)らすとも
なほあまりあるかなしみを
うつすよしなき汝(なれ)が身か
などかく秋を呼ぶ聲の
荒き響(ひゞき)をもたらして
人の心を亂すらむ

あゝ秋の日のさみしさは
小鹿(をじか)のしれるかぎりかは
清(すゞ)しき風に驚きて
羽袖もいとゞ冷(ひや)やかに
百千(もゝち)の鳥の群(むれ)を出て
浮べる雲に慣(な)るゝかな

菊より落つる花びらは
汝(な)がついばむにまかせたり
時雨(しぐれ)に染むるもみぢ葉(ば)は
汝(なれ)がかざすにまかせたり
聲を放ちて叫ぶとも
たれかいましをとゞむべき

星はあしたに冷やかに
露はゆふべにいと白し
風に隨ふ桐の葉の
枝に別れて散るごとく
天(みそら)の海にうらぶれて
たちかへり鳴け秋のかりがね

野路の梅

風かぐはしく吹く日より
夏の緑のまさるまで
梢のかたに葉がくれて
人にしられぬ梅ひとつ

梢は高し手をのべて
えこそ觸れめやたゞひとり
わがものがほに朝夕(あさゆふ)を
ながめ暮(くら)してすごしてき

やがて鳴く鳥おもしろく
黄金(こがね)の色にそめなせば
行きかふ人の目に觸れて
落ちて履(ふ)まるゝ野路(のぢ)の梅

門田にいでて

遠征する人を思ひて娘の
うたへる

門田(かどた)にいでて
　草とりの
身のいとまなき
　晝(ひる)なかば
忘るゝとには
　あらねども
まぎるゝすべぞ
　多かりき

夕ぐれ梭(をさ)を
　手にとりて
こゝろ靜かに
　織(お)るときは
人の得しらぬ
　思ひこそ
胸より湧(わ)きて
　流れけれ

あすはいくさの
　門出(かどで)なり
遠きいくさの
　門出なり
せめて別れの
　涙をば
名殘にせむと
　願ふかな

君を思へば
　わづらひも
照る日にとくる
　朝の露
君を思へば
　かなしみも
緑(みどり)にそゝぐ
　夏の雨

君を思へば
　闇(やみ)の夜も
光をまとふ
　星の空
君を思へば

浅茅生(あさぢふ)の
荒(あ)れにし野邊も
花のやど

胸の思ひは
つもれども
吹雪(ふぶき)はげしき
こひなれば
君が光に
照(て)らされて
消えばやとこそ
恨(うら)むなれ

寶はあはれ碎けけり

老いたる鍛冶のうたへる

寶(たから)はあはれ
　碎(くだ)けけり
さなり愛兒(まなご)は
　うせにけり
なにをかたみと
　ながめつゝ
こひしき時を
　忍ぶべき

ありし昔の
　香ににほふ
薄(うす)はなぞめの
　帶よけむ
麗(うる)はしかりし
　黒髪の
かざしの紅(あか)き
　珠(たま)よけむ
帶はあれども
　老(おい)が身に
ひきまとふべき
　すべもなし
珠(たま)はあれども
　白髪(しらが)に
うちかざすべき
　すべもなし

ひとりやさしき
　面影(おもかげ)は
眼(まなこ)の底に
　とゞまりて
あしたにもまた
　ゆふべにも
われにともなふ
　おもひあり

あゝたへがたき
　くるしみに
おとろへはてつ
　爐前(ほとまへ)に
仆(たふ)れかなしむ
　をりをりは
面影さへぞ
　力なき

われ中槌(なかつち)を
　うちふるひ
ほのほの前に
　はげめばや
胸にうつりし
　亡き人の
語(かた)らふごとく
　見ゆるかな

あな面影の
　わが胸に
活(い)きて微笑(ほほゑ)む
　たのしさは
やがてつとめを
　いそしみて
かなしみに勝つ
　生命(いのち)なり

汗(あせ)はこひしき
　涙なり
勞働(つとめ)は活ける
　思ひなり
いでやかひなの
　折るゝまで
けふのつとめを
　いそしまむ

新潮

一

我(われ)あげまきのむかしより
潮(うしほ)の音(おと)を聞き慣れて
磯邊に遊ぶあさゆふべ
海人(あま)の舟路を慕ひしが
やがて空(むな)しき其夢は
身の生業(なりはひ)となりにけり

七月夏の海(うみ)の香(か)の
海藻(あまも)に匂ふ夕まぐれ
兄もろともに舟浮(ふねう)けて
力をふるふ水馴棹(みなれざを)
いづれ舟出(ふなで)はいさましく
波間に響く櫂の歌

夕潮(ゆふしほ)青き海原(うなばら)に
すなどりすべく漕ぎくれば
巻(ま)きては開く波の上の
鴎の夢も冷やかに
浮び流るゝ海草(うみぐさ)の
目にも幽(かす)かに見ゆるかな

二

まなこをあげて落つる日の
きらめくかたを眺むるに
羽袖うちふる鶻隼(はやぶさ)は
彩(あや)なす雲を舞ひ出でて
翅(つばさ)の塵(ちり)を拂ひつゝ
物にかゝはる風情(ふぜい)なし

飄々として鳥を吹く
風の力もなにかせむ
勢龍(いきほひたつ)の行くごとく
羽音(はおと)を聞けば葛城の
そつ彦むかし引きならす
眞弓(まゆみ)の弦(つる)の響あり

希望(のぞみ)すぐれし鶻隼よ
せめて舟路のしるべせよ
げにその高き荒魂(あらだま)は
敵(てき)に赴(おもむ)く白馬(しろうま)の
白き鬣(たてがみ)うちふるひ
風を破るにまさるかな

海面(うみづら)見ればかげ動く
深紫の雲の色

はや暮れて行く天際に
行くへや遠き鶻隼の
もろ羽は彩にうつろひて
黄金の波にたゞよひぬ

朝夕を刻みてし
天の柱の影暗く
雲の帳もひとたびは
輝きかへる高御座
西に傾く夏の日は
遠く光彩を沈めけり

見ようるはしの夜の空
見ようるはしの空の星
北斗の清き影冴えて
望みをさそふ天の花
とはの宿りも舟人の
光を仰ぐためしかな

潮を照らす篝火の
きらめくかたを窺へば
松の火あかく燃ゆれども
魚行くかげは見えわかず
流れは急しふなべりに
觸れてかつ鳴る夜の浪

二

またゝくひまに風吹きて
舞ひ起つ雲をたとふれば
戰に臨むますらをの
あるは鉦うち貝を吹き
あるは太刀佩き劍執り
弓矢を持つに似たりけり

光は離れ星隱れ
みそらの花はちりうせぬ
彩美しき巻物を
高く舒べたる大空は
みるまに暗く覆はれて
目にすさまじく變りけり

聞けばはるかに萬軍の
鯨波のひゞきにうちまぜて
陣螺の音色ほがらかに
野の空高く吹けるごと
闇き潮の音のうち
いと新しき聲すなり

我あまたたび海にきて

風吹き起るをりをりの
波の響に慣れしかど
かゝる清しき音をたてて
奇しき魔の吹く角かとぞ
うたがはるゝは聞かざりき

こゝろせよかしはらからよ
な恐れそと叫ぶうち
あるはけはしき青山を
凌ぐにまがふ波の上
あるは千尋の谷深く
落つるにまがふ濤の影

戰ひ進むものゝふの
劍の霜を拂ふごと
溢るゝばかり奮ひ立ち
潮を撃ちて漕ぎくれば
梁はふたりの盾にして
柁は鋭き刃なり

たとへば波の西風の
梢をふるひふるごとく
舟は枯れゆく秋の葉の
枝に離れて散るごとし
帆檣なかば折れ碎け
篷は海に漂ひぬ

哀しや狂ふ大波の
舟うごかすと見るうちに
櫓をうしなひしはらからは
げに消えやすき白露の
落ちてはかなくなれるごと
海の藻屑とかはりけり

あゝ思のみはやれども
眼の前のおどろきは
劍となりて胸を刺し
千々に力を碎くとも
怒りて高き逆波は
猛き心を傷ましむ

命運よなにの戯れぞ
人の命は春の夜の
夢とやげにも夢ならば
いとど悲しき夢をしも
見るにやあらむ海にきて
まのあたりなるこの夢は

これを思へば胸滿ちて
流るゝ涙せきあへず

今はた櫂をうちふりて
波と戰ふ力なく
死して仆るゝ人のごと
身を舟板に投げ伏しぬ

一葉にまがふ舟の中
波にまかせて流れつゝ
聲を放ちて泣き入れば
げに底ひなきわだつみの
上に行方も定めなき
鴎の身こそ悲しけれ

時には遠き常闇の
光なき世に流れ落ち
朽ちて行くかと疑はれ
時には頼む人もなき
冷たき冥府の水底に
沈むかとこそ思はるれ

あゝあやまちぬよしや身は
おろかなりともかくてわれ
もろく果つべき命かは
照る日や月や上にあり
大龍神も心あらば
賤しきわれをみそなはせ

かくと心に定めては
波ものかはと勵みたち
闇のかなたを窺ふに
空はさびしき雨となり
潮にうつる燐の火の
亂れて燃ゆる影青し

我よるべなき海の上に
活ける力の胸の火を
わづかに頼む心より
消えてはもゆる闇の夜の
その靜かなる光こそ
漂ふ身にはうれしけれ

危ふきばかりともすれば
波にゆらるゝこの舟の
行くへを照らせ燐の火よ
海よりいでて海を焚く
青きほのほの影の外
道しるべなき今の身ぞ

碎かば碎けいざさらば
波うつ櫂はこゝにあり
たとへ舟路は暗くとも

世に勝つ道は前にあり
あゝ新潮（にひじほ）にうち乗りて
命運（さだめ）を追うて活（い）きて歸らむ

落梅集より

明治三十二年――同三十三年

（小諸にて）

常盤樹

あら雄々しきかな傷ましきかな
かの常盤樹の落ちず枯れざる
常盤樹の枯れざるは
百千の草の落つるより
傷ましきかな
其枝に懸る朝の日
其幹を運(めぐ)る夕月
など行く旅の迅速(すみやか)なるや
など電の影と馳するや
蝶の舞
花の笑
など遊ぶ日の世に短きや
など其醉の早く醒むるや
蟲草の葉に悲めば
一時(ひととき)にして既に霜
鳥潮の音に驚けば
一時にして既に雪
木枯高く秋落ちて
自然の色はあせゆけど
大力(だいりき)天を貫きて
坤軸遂に靜息(やすみ)なし
ものみな速くうらがれて
長き寒さも知らぬ間に
汝(いまし)千歳の時に嘯き
獨りし立つは何の力ぞ
白銀の花霏々として
吹雪の煙闇(くら)き時
四方は氷に閉されて
江海も音をひそむ時
汝(いまし)緑の蔭も朽ちせず
空を凌ぐは何の力ぞ
立てよ友なき野邊の帝王(すめらぎ)
ゆゝしく高く立てよ常盤樹
汝(いまし)の長き春なくば
山の命も老いなむか
汝(いまし)の深き息なくば
谷の響も絶えなむか
あしたには葉をうつ霙
ゆふべには枝うつ霰
千草も知らぬ冬の日の
嵐に叫ぶうきなやみ
いづれの日にか
氷は解けて
其葉の涙
消えむとすらむ

あゝよしさらば枝も摧(くだ)けて
終の色の落ちなむ日まで
雲浮かば
無縫の天衣
風立たば
不朽の緒琴
おごそかに
立てよ常盤樹
あら雄々しきかな傷ましきかな
かの常盤樹の落ちず枯れざる
常盤樹の枯れざるは
百千(もゝち)の草の落つるより
傷ましきかな

寂寥

岸の柳は低くして
羊の群の繪にまがひ
野薔薇の幹は埋もれて
流るゝ砂に跡もなし
蓼科山（たでしなやま）の山なみの
麓をめぐる河水や
魚住む淵に沈みては
鴨の頭の深緑
花さく岩にせかれては
天の鼓の樂の音
さても水瀬はくちなはの
かうべをあげて奔るごと
白波高くわだつみに
流れて下る千曲川

あした炎をたゝかはし
ゆふべ煙をきそひてし
駿河にたてる富士の根も
今はさびしき日の影に
白く輝く墓のごと

はるかに沈む雲の外
これは信濃の空高く
今も烈しき火の柱
雨なす石を降らしては
みそらを焦す灰けぶり
神夢さめし天地の
ひらけそめにし昔より
常世につもる白雪は
今も無間の谷の底
湧きてあふるゝ紅の
血潮の池を目にみては
布引に住むはやぶさも
翼をかへす淺間山

あゝ北佐久の岡の裾
御牧が原の森の影
夢かけめぐる旅に寢て
安き一日もあらねばや
高根の上にあかあかと
燃ゆる炎をあふぐとき
み谷の底の青巖に
逆まく浪をのぞむとき
かしこにこゝに寂寥（さびしさ）の
その味ひはにがかりき

あな寂寥(さびしさ)や其の道は
獣の足の跡のみか
舞ひて見せたる大空の
鳥のゆくへのそれのみか
さてもためしの燈火に
若き心をうかゞへば
人の命の樹下蔭
花深く咲き花散りて
枝もたわゝの智慧の實を
味ひそめしきのふけふ
知らずばなにか旅の身に
人のなさけも薄からむ
知らずばなにか移る世に
假の契りもあだならむ
一つの石のつめたきも
萬の聲をこゝに聽き
一つの花のたのしきも
千々の涙をそこに觀る
あな寂寥(さびしさ)や吾胸の
小休(をやみ)もなきを思ひみば
あはれの外のあはれさも
智慧のさゝやくわざぞ是

かの深草の露の朝
かの象潟の雨の夕
またはカナンの野邊の春
またはデボンの岸の秋
世をわびびとの寢覺には
あはれ鶉の聲となり
うき旅人の宿りには
ほのかに合歡(ねむ)の花となり
羊を友のわらべには
日となり星の數となり
夢に添ひ寢の農夫には
はつかねずみとあらはれて
あるは形にあるは音(ね)に
色ににほひにかはるこそ
いつはり薄き寂寥(さびしさ)よ
いづれいましのわざならめ

さなりおもては冷やかに
いとつれなくも見ゆるより
深き心はあだし世の
人に知られぬ寂寥(さびしさ)よ
むかしいましが雪山の
佛の夢に見えしとき
かりに姿は花も葉も
根もかぎりなき藥王樹
むかしいましが沅湘の
水のほとりにあらはれて

楚に捨てられしあてびとの
熱き涙をぬぐふとき

かりにいましは長沙羅の
鄂渚(がくしょ)の岸に生ひいでて
ゆふべ悲しき秋風に
香ひを送る※(けい)の草

またはいましがパトモスの
離れ小島にあらはれて
歎き仆るゝひとり身の
冷たき夢をさますとき

かりに面(おもて)は照れる日や
首はゆふべの空の虹
衣はあやの雲を着て
足は二つの火の柱

默示をかたる言の葉は
高きらつぱの天の聲

思へばむかし北のはて
舟路侘しき佐渡が島
雲に戀しき天つ日の
光も薄く雪ふれば

毘藍の風は吹き落ちて
梵音聲(おんじやう)を驚かし
岸うつ波は波羅密の
海潮音をとゞろかし

朝霜ふれば袖閉ぢて
衣は凍る鴛鴦の羽
夕霜ふれば現し身に
八つのさむさの寒古鳥

ましてや國の罪人の
安房の生れの梅陀羅(あま)が子を
あな寂寥(さびしさ)や寂寥(さびしさ)や
ひとりいましにあらずして

天にも地にも誰かまた
そのかなしみをあはれまむ

げに晝の夢夜の夢
旅の愁にやつれては
日も暖に花深き
空のかなたを慕ふとき

なやみのとげに責められて
袖に涙のかゝるとき
汲みて味ふ寂寥(さびしさ)の
にがき誠の一雫

秋の日遠しあしたにも
高きに登りゆふべにも
流れをつたひ獨りして
ふりさけ見れば鳥影の

天の鏡に舞ふかなた

思ひを閉す白雲の
浮べるかたを望めども
都は見えず寂寥(さびしさ)よ
來りてわれと共にかたりね

千曲川旅情の歌

一

小諸なる古城のほとり
雲白く遊子(いうし)悲しむ
緑なす蘩※(はこべ)は萌えず
若草も藉くによしなし
しろがねの衾(ふすま)の岡邊
日に溶けて淡雪流る

あたゝかき光はあれど
野に滿つる香(かをり)も知らず
淺くのみ春は霞みて
麥の色わづかに青し
旅人の群はいくつか
畠中の道を急ぎぬ

暮れ行けば淺間も見えず
歌哀し佐久の草笛
千曲川いざよふ波の
岸近き宿にのぼりつ
濁り酒濁れる飲みて
草枕しばし慰む

二

昨日またかくてありけり
今日もまたかくてありなむ
この命なにを齷齪(あくせく)
明日をのみ思ひわづらふ

いくたびか榮枯の夢の
消え殘る谷に下りて
河波のいざよふ見れば
砂まじり水巻き歸る

嗚呼古城なにをか語り
岸の波なにをか答ふ
過(いに)し世を靜かに思へ
百年(もゝとせ)もきのふのごとし

千曲川柳霞みて
春淺く水流れたり
たゞひとり岩をめぐりて

この岸に愁(うれひ)を繋(つな)ぐ

鼠をあはれむ

星近く戸を照せども
戸に枕して人知らず
鼠古巣を出づれども
人夢さめず驚かず

情の海の淡路島
通ふ千鳥の聲絶えて
やじりを穿つ盜人の
寢息をはかる影もなし

長き尻尾をうちふりつ
小踊りしつゝ軒づたひ
煤のみ深き梁（うつばり）に
夜をうかがふ古鼠

光にいとひいとはれて
白齒もいと冷やかに
竈の隅に忍びより
ながしに捜る鰺の骨

闇夜に物を透かし視て
暗きに遊ぶさまながら
なほ聲無きに疑ひて
影を懼れてきゝと鳴き鳴く

勞働雜詠

一　朝

朝はふたゝびこゝにあり
朝はわれらと共にあり
埋れよ眠行けよ夢
隱れよさらば小夜嵐

諸羽(もろは)うちふる鷄は
咽喉(のんど)の笛を吹き鳴らし
けふの命の戰鬪(たゝかひ)の
よそほひせよと叫ぶかな

野に出でよ野に出でよ
稻の穗は黃にみのりたり
草鞋とく結(ゆ)へ鎌も執れ
風に嘶く馬もやれ

雲に鞭(むち)うつ空の日は
語らず言はず聲なきも
人を勵ます其音は
野山に谷にあふれたり

流るゝ汗と膚(あぶら)との
落つるやいづこかの野邊に
名も無き賤のものゝふを
來りて護れ軍神(いくさがみ)

野に出でよ野に出でよ
稻の穗は黃にみのりたり
草鞋とく結(ゆ)へ鎌も執れ
風に嘶く馬もやれ

あゝ綾絹につゝまれて
爲すよしも無く寢ぬるより
薄き襤褸(つゞれ)はまとふとも
活きて起つこそをかしけれ

匍匐(はらば)ふ蟲の賤が身に
羽翼(つばさ)を惠むものや何
酒か涙か歎息(ためいき)か
迷か夢か皆なあらず

野に出でよ野に出でよ
稻の穗は黃にみのりたり
草鞋とく結(ゆ)へ鎌も執れ

風に嘶く馬もやれ

さながら土に繋がるゝ
重き鎖を解きいでて
いとど暗きに住む鬼の
笞(しもと)の責をいでむ時

口には朝の息を吹き
骨には若き血を纏ひ
胸に驕慢手に力
霜葉を履(ふ)みてとく來れ

野に出でよ野に出でよ
稻の穗は黃にみのりたり
草鞋とく結(ゆ)へ鎌も執れ
風に嘶く馬もやれ

二　晝

誰か知るべき秋の葉の
落ちて樹の根の埋(うづ)むとき
重く聲無き石の下
清水溢れて流るとは

誰か知るべき小山田(をやまだ)の
稻穗のたわに實るとき
花なく香なき賤(しづ)の胸
生命(いのち)踊りて響くとは

共に來て蒔き來て植ゑし
田の面(も)に秋の風落ちて
野邊の琥珀(こはく)を鳴らすかな
刈り乾せ刈り乾せ稻の穗を

血潮は草に流さねど
力うちふり鍬をうち
天の風雨(あらし)に雷霆(いかづち)に
わが鬪(たたか)ひの跡やこゝ

見よ日は高き青空の
端より端を弓として
今し父の矢母の矢の
光を降らす眞晝中

共に來て蒔き來て植ゑし
田の面(も)に秋の風落ちて
野邊の琥珀(こはく)を鳴らすかな
刈り乾せ刈り乾せ稻の穗を

左手に稻を捉む時
右手に利鎌を握る時
胸滿ちくれば火のごとく
骨と髓との燃ゆる時

土と塵埃と泥の上に
汗と膩の落つる時
緑にまじる黄の莖に
烈しき息のかゝる時

共に來て蒔き來て植ゑし
田の面に秋の風落ちて
野邊の琥珀を鳴らすかな
刈り乾せ刈り乾せ稻の穗を

思へ名も無き賤ながら
遠きに石を荷ふ身は
夏の白雨過ぐるごと
ほまれ短き夢ならじ

生命の長き戰鬪は
こゝに音無し聲も無し
勝ちて桂の冠は
わづかに白き頰かぶり

共に來て蒔き來て植ゑし
田の面に秋の風落ちて
野邊の琥珀を鳴らすかな
刈り乾せ刈り乾せ稻の穗を

三　暮

揚げよ勝鬨手を延べて
稻葉を高くふりかざせ
日暮れ勞れて道の邊に
倒るゝ人よとく歸れ
彩雲や
落つる日や
行く道すがら眺むれば
秋天高き夕まぐれ
共に蒔き
共に植ゑ
共に稻穗を刈り乾して
歌うて歸る今の身に
ことしの夏を
かへりみすれば
嗚呼わが魂は
わなゝきふるふ
この日怖れをかの日に傳へ

この夜望みをかの夜に繋ぎ
門に立ち
野邊に行き
ある時は風高くして
青草長き谷の影
雲に嵐に稲妻に
行先(ゆくて)も暗く聲を呑み
ある時は夏寒くして
山の鳩啼く森の下
たまたま虹に夕映(ゆふばえ)に
末のみのりを祈りてき
それは逝き
これは來て
餓と涙と送りてし
同じ自然の業(わざ)ながら
今は思ひのなぐさめに
光をはなつ秋の星
あゝ勇みつゝ踊りつゝ
諸手(もろて)をうちて笑ひつゝ
樹下(こした)の墓を横ぎりて
家路に通ふ森の道
眠る聖(ひじり)も盗賊(ぬすびと)も
皆な土くれの苔一重(ひとへ)
霧立つ空に入相の
精舎の鐘の響く時

あゝ驕慢と歡喜(よろこび)と
力を息に吹き入れて
勝ちて歸るの勢に
揚げよ樂しき秋の歌

爐邊雜興

散文にてつくれる即興詩

あら荒くれたる賤の山住や顔も黒し手も黒しすごすごと林の中を歸る藁草履の土にまみれたるよ

こゝには五十路六十路を經つつまだ海知らぬ人々ぞ多き

炭燒の烟をながめつゝ世の移り變るも知らで谷陰にぞ住める

蒲公英（たんぽぽ）の黄に蕗の花の白きを踏みつゝ慣れし其足何ぞ野獸の如き

岡のべに通ふ路には野苺の實を垂るゝあり摘みて舌うちして年を經にけり

和布賣（わかめうり）の越後の女三々五々群をなして來（きた）る呼びて窓に倚りて海の藻を買ふぞゆかしき

大豆を賣りて皿の上に載せたる鹽鮭の肉鹽鮭何の磯の香もなき

年々の暦と共に壁に煤けたる錦繪を見れば海ありき廣重の筆なりき

爺（ぢゞ）は波を知らず婆（ばゝ）は潮の音を知らず孫は千鳥を鷄の雛かとぞ思ふ

たまたま伊勢詣のしるしにとて送られし貝の一ひらを見れば大わだつみのよろづの波を彫（きざ）めるとぞ言ひし言の葉こそ思ひいでらるれ

品川の沖によるといふなる海苔の新しきは先づ棚の佛にまゐらせて

山家にありて遠く海草の香（か）をかぐとぞいふばかりなる

黄昏

つと立ちよれば垣根には
露草の花さきにけり
さまよひくれば夕雲や
これぞこひしき門邊なる

瓦の屋根に烏啼き
烏歸りて日は暮れぬ
おとづれもせず去(い)にもせで
螢と共にこゝをあちこち

枝うちかはす梅と梅

枝うちかはす梅と梅
梅の葉かげにそのむかし
鶏(とり)は鶏(とり)とし並び食ひ
われは君とし遊びてき

空風吹けば雲離れ
別れいざよふ西東
青葉は枝に契るとも
緑は永くとゞまらじ

水去り歸る手をのべて
誰れか流れをとゞむべき
行くにまかせよ嗚呼さらば
また相見むと願ひしか

遠く別れてかぞふれば
かさねて長き秋の夢
願ひはあれど陶磁(すゑもの)の
くだけて時を傷(いた)みけり

わが髪長く生ひいでて
額の汗を覆ふとも
甲斐なく珠(たま)を抱きては
罪多かりし草枕

雲に浮びて立ちかへり
都の夏にきて見れば
むかしながらのみどり葉は
蔭いや深くなれるかな

わかれを思ひ逢瀬をば
君とし今やかたらふに
二人すわりし青草は
熱き涙にぬれにけり

めぐり逢ふ君やいくたび

めぐり逢ふ君やいくたび
あぢきなき夜を日にかへす
吾命暗(やみ)の谷間も
君あれば戀のあけぼの

樹の枝に琴は懸けねど
朝風の來て彈(ひ)くごとく
面影に君はうつりて
吾胸を靜かに渡る

雲迷ふ身のわづらひも
紅の色に微笑(ほゝゑ)み
流れつゝ冷(ひ)ゆる涙も
いと熱き思を宿す

知らざりし道の開けて
大空は今光なり
もろともにしばしたゝずみ
新しき眺めに入らむ

あゝさなり君のごとくに

あゝさなり君のごとくに
何かまた優しかるべき
歸り來てこがれ侘ぶなり
ねがはくは開けこの戸を

ひとたびは君を見棄てて
世に迷ふ羊なりきよ
あぢきなき石を枕に
思ひ知る君が牧場(まきば)を

樂しきはうらぶれ暮し
泉なき砂に伏す時
青草の追懷(おもひで)ばかり
悲しき日樂しきはなし

悲しきはふたゝび歸り
緑なす野邊を見る時
飄泊(さまよひ)の追懷(おもひで)ばかり
樂しき日悲しきはなし

その笛を今は頼まむ
その胸にわれは息(いこ)はむ
君ならで誰か飼ふべき
天地(あめつち)に迷ふ羊を

思より思をたどり

思より思をたどり
樹下(こした)より樹下(こした)をつたひ
獨りして遲く歩めば
月今夜(こよひ)幽かに照らす

おぼつかな春のかすみに
うち煙(けぶ)る夜の靜けさ
仄白き空の鏡は
俤の心地こそすれ

物皆はさやかならねど
鬼の住む暗にもあらず
おのづから光は落ちて
吾顏に觸(ふ)るぞうれしき

其光こゝに映りて
日は見えず八重(やへ)の雲路に
其影はこゝに宿りて
君見えず遠の山川

思(おも)ひやるおぼろおぼろの
天の戸は雲かあらぬか
草も木も眠れるなかに
仰ぎ視て涕を流す

吾戀は河邊に生ひて

吾戀は河邊に生ひて
根を浸(ひた)す柳の樹なり
枝延びて緑なすまで
生命(いのち)をぞ君に吸(す)ふなる

北のかた水去り歸り
晝も夜も南を知らず
あゝわれも君にむかひて
草を藉き思を送る

吾胸の底のこゝには

吾胸の底のこゝには
言ひがたき祕密(ひめごと)住めり
身をあげて活(い)ける牲(にへ)とは
君ならで誰かしらまし

もしやわれ鳥にありせば
君の住む窓に飛びかひ
羽を振りて晝は終日(ひねもす)
深き音に鳴かましものを

もしやわれ梭(をさ)にありせば
君が手の白きにひかれ
春の日の長き思を
その絲に織らましものを

もしやわれ草にありせば
野邊に萌(も)え君に踏まれて
かつ靡きかつは微笑(ほゝゑ)み
その足に觸れましものを

わがなげき衾に溢れ
わがうれひ枕を浸す
朝鳥に目さめぬるより
はや床は濡れてたゞよふ

口脣(くちびる)に言葉ありとも
このこゝろ何か寫さむ
たゞ熱き胸より胸の
琴にこそ傳ふべきなれ

君こそは遠音に響く

君こそは遠音に響く
入相の鐘にありけれ
幽かなる聲を辿りて
われは行く盲目(めしひ)のごとし

君ゆゑにわれは休まず
君ゆゑにわれは仆れず
嗚呼われは君に引かれて
暗き世をわづかに捜る

たゞ知るは沈む春日の
目にうつる天(そら)のひらめき
なつかしき聲するかたに
花深き夕を思ふ

吾足は傷つき痛み
吾胸は溢れ亂れぬ
君なくば人の命に
われのみや獨(ひとり)ならまし

あな哀(かな)し戀の暗には
君もまた同じ盲目(めしひ)か
手引せよ盲目(めしひ)の身には
盲目(めしひ)こそうれしかりけれ

こゝろをつなぐしろかねの

こゝろをつなぐ銀（しろかね）の
鎖も今はたえにけり
こひもまこともあすよりは
つめたき砂にそゝがまし

顔もうるほひ手もふるひ
逢うてわかれををしむより
人目の關はへだつとも
あかぬむかしぞしたはしき

形となりて添はずとも
せめては影と添はましを
たがひにおもふこゝろすら
裂きて捨つべきこの世かな

おもかげの草かゝるとも
古（ふ）りてやぶるゝ壁のごと
君し住まねば吾胸は
つひにくだけて荒れぬべし

一歩に涙五歩に血や
すがたかたちも空の虹
おなじ照る日にたがらへて
永き別れ路見るよしもなし

罪なれば物のあはれを

罪なれば物のあはれを
こゝろなき身にも知るなり
罪なれば酒をふくみて
夢に醉ひ夢に泣くなり

罪なれば親をも捨てて
世の鞭を忍び負ふなり
罪なれば宿を逐はれて
花園に別れ行くなり

罪なれば刃に伏して
紅き血に流れ去るなり
罪なれば手に手をとりて
死の門にかけり入るなり

罪なれば滅び碎けて
常闇（とこやみ）の地獄のなやみ
嗚呼二人（ふたり）抱（いだ）きこがれつ
戀の火にもゆるたましひ

風よ靜かにかの岸へ

風よ靜かに彼(か)の岸へ
こひしき人を吹き送れ
海を越え行く旅人の
群(むれ)にぞ君はまじりたる

八重の汐路をかき分けて
行くは僅に舟一葉
底白波(しらなみ)の上なれば
君安かれと祈るかな

海とはいへどひねもすは
皐月(さつき)の野邊と眺め見よ
波とはいへど夜もすがら
緑の草と思ひ寢よ

もし海怒り狂ひなば
われ是岸(このきし)に仆れ伏し
いといと深き歎息(ためいき)に
其嵐をぞなだむべき

樂しき初憶(はじおも)ふ毎
哀(かな)しき終堪(をはり)へがたし
ふたゝびみたびめぐり逢ふ
天(あま)つ恵みはありやなしや

あゝ緑葉の嘆(なげき)をぞ
今は海にも思ひ知る
破れて胸は紅き血の
流るゝがごと滴るがごと

椰子の實

名も知らぬ遠き島より
流れ寄る椰子の實一つ

故郷(ふるさと)の岸を離れて
汝(なれ)はそも波に幾月(いくつき)

舊(もと)の樹は生ひや茂れる
枝はなほ影をやなせる

われもまた渚を枕
孤身(ひとりみ)の浮寢の旅ぞ

實をとりて胸にあつれば
新(あらた)なり流離の憂(うれひ)

海の日の沈むを見れば
激(たぎ)り落つ異郷の涙

思ひやる八重の汐々(しほ〴〵)へ
いづれの日にか國へ歸らむ

浦島

浦島の子とぞいふなる
遊ぶべく海邊に出でて
釣すべく岩に上りて
長き日を絲垂れ暮す

流れ藻の青き葉蔭に
隱れ寄る魚かとばかり
手を延べて水を出でたる
うらわかき處女（をとめ）のひとり

名のれ名のれ奇（く）しき處女（をとめ）よ
わだつみに住める處女（をとめ）よ
思ひきや水の中にも
黒髪の魚のありとは

かの處女（をとめ）嘆きて言へる
われはこれ潮（うしほ）の兒なり
わだつみの神のむすめの
乙姫といふはわれなり

龍（たつ）の宮荒れなば荒れね
捨てて來し海へは入らじ
あゝ君の胸にのみこそ
けふよりは住むべかりけれ

舟路

海にして響く艫の聲
水を撃つ音のよきかな
大空に雲は飄(たゞよ)ひ
潮分けて舟は行くなり

靜なる空に透かして
青波の深きを見れば
水底(みなそこ)やはてもしられず
流れ藻の浮きつ沈みつ

緑なす草のかげより
湧き出づる泉ならねど
おのづから滿ち來る汐は
海原のうちに溢れぬ

さながらに遠き白帆は
群をなす牧場(まきば)の羊
吹き送る風に飼はれて
わだつみの野邊を行くらむ

雲行けば舟も隨ひ
舟行けば雲もまた追ふ
空と水相合ふかなた
諸共にけふの泊(とまり)へ

鳥なき里

鳥なき里の蝙蝠や
宗助(そうすけ)鍬をかたにかけ
幸助(かうすけ)網を手にもちて
山へ宗助海へ幸助

黄瓜花さき夕影に
蝉鳴くかなた桑の葉の
露にすゞしき山道を
海にうらやむ幸助のゆめ

磯菜遠近(をちこち)砂の上に
舟干すかなた夏潮の
鰺藻に響く海の音を
山にうらやむ宗助のゆめ

かくもかはれば變る世や
幸助鍬をかたにかけ
宗助網を手にもちて
山へ宗助海へ幸助

霞にうつり霜に暮れ
たちまち過ぎぬ春と秋
のぞみは草の花のごと
砂に埋れて見るよしもなし

さながらそれも一時(ひととき)の
胸の青雲いづこぞや
かへりみすれば跡もなき
宗助のゆめ幸助のゆめ

ふたゝび百合はさきかへり
ふたゝび梅は青みけり
深き緑の樹の蔭を
迷うて歸る宗助幸助

藪入

上

朝淺草を立ちいでて
かの深川を望むかな
片影(すゞ)冷しわれは今
こひしき家に歸るなり

籠の雀のけふ一日(ひとひ)
いとまたまはる藪入や
思ふまゝなる吾身こそ
空飛ぶ鳥に似たりけれ

大川端を來て見れば
帶は淺黄の染模樣
うしろ姿の小走りも
うれしきわれに同じ身か

柳の並樹暗くして
墨田の岸のふかみどり
漁(すなど)り舟の艫の音は
靜かに波にひゞくかな

白帆をわたる風は來て
鬢の井筒(ゐづゝ)の香を拂ひ
花あつまれる浮草は
われに添ひつゝ流れけり

潮わきかへる品川の
沖のかなたに行く水や
思ひは同じかはしもの

わがなつかしの深川の宿

下

その名ばかりの鮨つけて
やがて一日(ひとひ)は暮れにけり
いとまごひして見かへれば
蚊遣(かやり)に薄き母の影

あゆみは重し愁ひつゝ
岸邊を行きて吾宿の
今のありさま忍ぶにも
忍ぶにあまる宿世(すくせ)かな

家をこゝろに浮ぶれば
夢も冷たき古簀子(ふるすのこ)

西日悲しき土壁（つちかべ）の
まばら朽ちたる裏住居

南の廂（ひさし）傾きて
垣に短かき草箒
破（や）れし戸に倚る夏菊の
人に昔を語り顔

風吹くあした雨の夜半（よは）
すこしは世をも知りそめて
むかしのまゝの身ならねど
かゝる思ひは今ぞ知る

身を世を思ひなげきつゝ
流れに添うてあゆめばや
今の心のさみしさに
似るものもなき眺めかな

夕日さながら畫のごとく
岸の柳にうつろひて
汐みちくれば水禽の
影ほのかなり隅田川

茶舟を下す舟人の
聲遠近（をちこち）に聞えけり

水をながめてたゝずめば
深川あたり迷ふ夕雲

惡夢

少年の昔よりかりそめに相知れるなにがし、獄に繋がるゝことこゝに三とせあまりなりしが、はからざりき飛報かれの凶音を傳へぬ。今春獄吏に導かれて、かれを巣鴨の病床に訪ひしは、舊知相見るの最後にてありき、かれ學あり、才あり、西の國の言葉にも通じ、宗教の旨をも味はひ知り、おほかたの藝能にもつたなからず、人にも侮られまじき程の品かたちは持てりしに、其半生を思ひやれば實に慘苦と落魄との連鎖とも言ふべかりき。かれは春の日の長閑に暖かなる家庭に生ひたちて、希望と幸福とを一身に荷ひたりしかど、やがて獄窓に呻吟せしの日は人生流離の極みを盡したる後なりき。あはれむべし、死と狂と罪とを除きて他にかれの行くべき道とてはあらざりしなり。われは今、かれが惡夢を憐むの餘り、一篇の蕪辭囚人の愁ひをとりて、みだりに花鳥の韻事を穢す、罪の受くべきはもとよりわが期する所なり。

其耳はいづこにありや
其胸はいづこにありや
激り落つ愁の思
この心誰に告ぐべき

秋蠅の窓に殘りて
日の影に飛びかふごとく
あぢきなき牢獄のなかに
伏して寢ねまたも目さめぬ

夜な〳〵の衾は濡れて
吾床は乾く間も無し
黒髪は霜に衰へ
若き身は歎きに老いぬ

春やなき無間の谷間
潮やなき紅蓮の岸邊
憔悴の死灰の身には
熱き火の燃ゆる罪のみ

銀の臺も碎け
戀の矢も朽ちて行く世に
いつまでか骨に刻みて
時しらず活くる罪かも

空の鷲われに來よとや
なにかせむ自在なき身は
天の馬われに來よとや
なにかせむ鐵鎖ある身は

いかづちの火を吹くごとく
この痛み胸に踊れり
なかなかに罪の住家(すみか)は
濃き陰の暗にこそあれ

いとほしむ人なき我ぞ
隠れむにものなき我ぞ
血に泣きて聲は呑むとも
寂寞(さびしさ)の裾こそよけれ

世を知らぬをさなき昔
香ににほふ妹(いも)を抱きて
すゝりなく恨みの日より
吾蟲は驕(たかぶ)るばかり

わがいのち戯(たはれ)の臺(うてな)
その惡を舞ふにやあらむ
わがこゝろ悲しき鏡
その夢を見るにやあらむ

人の世に羽を擊つ風雨(あらし)
天地(あめつち)に身(み)は捨小舟
今更に我をうみてし
亡き母も恨めしきかな

父いかに舊(もと)の山河
妻いかに遠(とほ)の村里
この道を忘れたまふや
この空を忘れたまふや

いかなれば歎きをすらむ
その父はわれを捨つるに
いかなれば忍びつ居らむ
その妻はわれを捨つるに

くろがねの窓に縋りて
故郷(ふるさと)の空を望めば
浮雲や遠く懸りて
履みなれし丘にさながら

さびしさの訪ひくる外に
おとなひも絶えてなかりし
吾窓に鳴く音を聽けば
人知れず涙し流る

鵯(ひよどり)よ翅を振りて
黄葉(もみぢば)の陰に歌ふか
幽囚(とらはれ)の笞(しもと)の責や
人の身は鳥にもしかじ

あゝ一葉(ひとは)枝に離れて
いづくにか漂ふやらむ
照れる日の光はあれど
わがたましひは暗くさまよふ

響りん〳〵音りん〳〵

響りん〳〵音りん〳〵
うちふりうちふる鈴高く
馬は蹄をふみしめて
故郷の山を出づるとき
その黒毛なす鬣(たてがみ)は
冷(すゞ)しき風に吹き亂れ
その紫の兩眼は
青雲遠く望むかな
枝の緑に袖觸れつ
あやしき鞍に跨りて
馬上に歌ふ一ふしは
げにや遊子の旅の情

あゝをさなくて國を出で
東の磯邊西の濱
さても繫がぬ舟のごと
夢長きこと二十年
たま〳〵ことし歸りきて
昔懷へばふるさとや
蔭を岡邊に尋ぬれば
松柏(しようはく)すでに折れ碎け
徑(みち)を川邊にもとむれば
野草は深く荒れにけり
菊は心を驚かし
蘭は思を傷ましむ
高きに登り草を藉き
惆悵として眺むれば
檜原(ひばら)に迷ふ雲落ちて
淚流れてかぎりなし

去(い)ね〳〵かゝる古里(ふるさと)は
ふたゝび言ふに足らじかし
あゝよしさらばけふよりは
日行き風吹き彩雲(あやぐも)の
あやにたなびくかなたをも
白波高く八百潮の
湧き立ちさわぐかなたをも
かしこの岡もこの山も
いづれ心の宿とせば
しげれる谷の野葡萄に
秋のみのりはとるがまゝ
深き林の黄葉(もみぢば)に
秋の光は履(ふ)むがまゝ

響りん〳〵音りん〳〵

うちふりうちふる鈴高く
馬は首(かうべ)をめぐらして
雲に嘶きいさむとき
かへりみすれば古里(ふるさと)の
檜原(ひばら)は目にも見えにけるかな

翼なければ

羽翼(つばさ)なければ繋がれて
朽ちはつべしとかねてしる
光なければ埋もれて
老いゆくべしとかねてしる

知る人もなき山蔭に
朽ちゆくことを厭はねば
牛飼ふ野邊の寂しさを
かくれがとこそ頼むなれ

埋(う)もるゝ花もありやとて
獨り戸に倚り眺むれば
ゆふべ空(むな)しく日は暮れて
牧場の草に春雨(はるさめ)のふる

罪人と名にも呼ばれむ

罪人(つみびと)と名にも呼ばれむ
罪人(つみびと)と名にも呼ばれむ
歸らじとかねて思へば
嗚呼涙さらば故郷(ふるさと)

駒とめて路の樹蔭に
あまたたびかへりみすれば
輝きて立てる白壁
さやかにも見えにけるかな

鬣(たてがみ)は風に吹かれて
吾駒の歩みも遲し
愁ひつゝ蹄をあげて
雲遠き都にむかふ

戰ひの世にしあなれば
野の草の露と知れれど
吾父の射る矢に立ちて
消えむとは思ひかけずよ

捨てよとや紙にもあらず
吾心燒くよしもなし
捨てよとや筆にもあらず
吾心折るよしもなし

そのねがひ親や古(ふ)りたる
このおもひ子や新しき
つくづくと父を思へば
吾袖は紅き血となる

靜息(やすみ)なく激(たぎ)つ胸には
柵(しがらみ)もなにかとゞめむ
洪水(おほみづ)の溢るゝごとく
海にまで入らではやまじ

はらからやさらば故郷(ふるさと)
去(い)ねよ去(い)ねよ去ねよ吾駒
諸共(もろとも)に暗く寂しく
故(むかし)の園を捨てて行かまし

胡蝶の夢

胡蝶の夢の人の身を
旅といふこそうれしけれ
常世(とこよ)に長き天地(あめつち)を
宿といふこそをかしけれ

青き山邊は吾枕
花さく野邊は吾衾(わがしとね)
星縫ふ空は吾帳(わがとばり)
さかまく海は吾緒琴(わがをごと)

いづこよりとは告げがたし
いづこまでとは言ひがたし

いま日の光いま嵐
來る歡樂(たのしみ)哀傷(かなしみ)の
人のさかりをかりそめに
夏といはむもおもしろや

あゝわれひとの知らぬ間に
心の色は褪せ易し
胸うち掩ふ緑葉(みどりば)の
若き命もいくばくぞ

かんばせの花紅き子も
あはれや早く翁顔

あるひは高く擊てれども
翅碎けて八重徘徊(むくら)
あるひは遠く舞へれども
望は落ちて塵埃(あくた)

譽も聲も浮ける雲
すぐれし才はいづこぞや
涙も夢も草の雨
流れて更に音も無し

思うて誰か傷まざる
歩みて誰か迷はざる

人の命を兒童(わらはべ)の
※戯(たはれ)と言ふは誰が言葉
賤も聖も丈夫(ますらを)も
兒童(わらはべ)ならぬものやある

晝には晝に遊ぶべし

夜には夜に遊ぶべし
破りはつべき世ならねば
身は狂ふこそ悲しけれ

捨てつ拾ひつこの命
行きつ運(めぐ)りつこの環(たまき)

落葉松の樹

落葉松（からまつ）の樹はありとても
石南花（しゃくなげ）の花さくとても
故郷（ふるさと）遠き草枕
思はなにか慰まむ
旅寝は胸も病むばかり
沈む憂は酔ふがごと
獨りぬる夜の夢にのみ
たゞ夢にのみ山路を下る

ふと目はさめぬ

ふと目は覺めぬ五とせの
心の醉に驚きて
若き是身(このみ)をながむれば
はや吾春は老いにけり

夢の心地(こゝち)も甘かりし
昔は何を知れとてか
淸(すず)しき星も身を呪ふ
今は何をか思へとや

剛愎(かたくな)なりし吾さへも
折れて泣きしは戀なりき
荒き胸にも一輪の
花をかざすは戀なりき

勇める馬の狂ひいで
鬣(たてがみ)長く嘶きて
風こゝちよき青草の
野邊を蹄に履(ふ)むがごと

又は眼(まなこ)も紫に
胸より熱き火を吹きて
汲めど盡きせぬ眞淸水の
泉に喘(あへ)ぎよるがごと

若き心の躍りては
軛(くびき)も綱も捨てけりな
こがれつ醉ひつ筆振れば
筆神ありと思ひてき

あゝうつくしき花草は
咲く間を待たで萎(しぼ)むらむ
消(き)えはてにけり吾戀は
藝術諸共(たくみもろとも)消えにけり

そは何故のうき世にて
人に誠はありながら
戀路の末はとこしへの
冬を生命(いのち)に刻(きざ)むらむ

黒髮われを覆ふとも
血潮はわれを染むるとも
花口脣(くちびる)を飾るとも

思は胸を傷(いた)ましむ

繪筆うちふる吾指は
歎きのために震ふかな
涙に濡るゝ吾紙は
象空(かたわな)しく消(き)ゆるかな

かはりはてたる吾命
かはりはてたる吾思
かはりはてたる吾戀路
かはりはてたる吾藝術(たくみ)

この世はあまり實(み)にすぎて
あたら吾身は夢ばかり
なぐさめもなき幻(まぼろし)の
境に泣きてさまよふわれは

縫ひかへせ

縫ひかへせ縫ひかへせ
膩(あぶら)に染みし其袂
涙に濡れし其袂
濯(すゝ)げよさらば嘆かずもがな

縫ひかへせ縫ひかへせ
君が衣を縫ひかへせ
愁(うれひ)は水に汗は瀬に
濯(すゝ)げよさらば嘆かずもがな

縫ひかへせ縫ひかへせ
捨てよ昔の夢の垢(あか)
やめよ甲斐なき物思
濯(すゝ)げよさらば嘆かずもがな

縫ひかへせ縫ひかへせ
腐れて何の袖かある
勞(つか)れて何の道かある
濯(すゝ)げよさらば嘆かずもがな

縫ひかへせ縫ひかへせ
薄き羽袖の蝉すらも
歌うて殻を出づる世に
濯(すゝ)げよさらば嘆かずもがな

縫ひかへせ縫ひかへせ
君がなげきは古(ふ)りたりや
とく新しき世に歸れ
濯(すゝ)げよさらば嘆かずもがな

青空文庫情報

底本：「藤村詩抄」岩波文庫、岩波書店
1927（昭和2）年7月10日第1刷発行
1957（昭和32）年7月5日第35刷改版発行
1991（平成3）年11月12日第75刷発行
※詩の本文は二字下げで、「鷲の歌」を除いて二段組みです。
入力：土屋隆
校正：浅原庸子
2004年5月10日作成
2016年5月7日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

藤村詩抄

島崎藤村自選

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　島崎藤村
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/